

# 9～11・12世紀における北方世界の交流

蓑島 栄紀

## はじめに

本稿では、北海道を議論の支点としつつ、日本列島北部および北方ユーラシア大陸に広がる地域を指して、仮に「北方世界」とする。

日本古代に並行する時期、北海道には続縄文文化（前5世紀頃～後7世紀）あるいはその後裔である擦文文化（7～13世紀頃）と、サハリン方面を原郷とするオホーツク文化（5～9世紀頃）とが並存していた。その歴史には、環境・生業や文化の諸側面における独自性が顕著であるが、同時に、倭・日本のような列島中央部の王権・国家とも深いつながりを有し、また靺鞨・渤海や女真・契丹（遼）など、北方ユーラシアの諸民族の世界との関係にも無視しえないものがある。

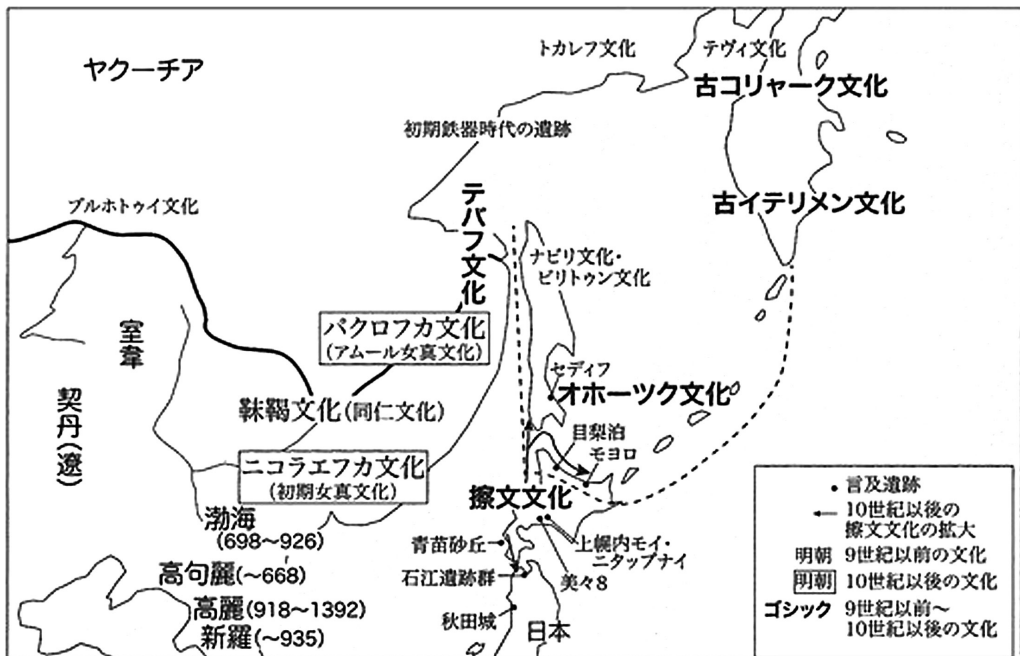


図1 古代の北方世界(蓑島作図(蓑島2014に加筆・修正))  
 ※菊池(1995a・2004)、中澤(2012)、ブタシンスキー(2013)を参考とした。

(図1) 蓑島 2015 より転載

こうした古代の「北方世界」は、日本や東アジアの歴史における「周縁」「境界」としての特性を強く示すことが以前から指摘されている(鈴木 2014 など参照)。「北方世界」の歴史の究明は、既成の日本史を相対化し、その歴史像をより開かれたものにするうえで大きく資するであろう。

一方で、2007年に採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」にみるように、今日、現代世界を構成する政治的主体の一つとして、「先住民族」の地位が注目を集めていることも重要である。古代の「北方世界」は、アイヌ民族などの先住民族およびその祖先集団が活動してきた地域であり、そこでは「先住民族史」あるいは「古代アイヌ史」といった視点を導入する可能性も探られなければならない(これに関する現時点の私案・構想は、蓑島 2010a・2014・2015 などにその一端を示した)。

以上のような関心のもとに、本稿では9～12世紀頃までの北方世界の交流史を概観する。こうした試みによって、「古代北方世界」の歴史を、「東アジア」あるいは「東部ユーラシア」のような広域的な歴史像に接合して把握するための手がかりを、多少なりとも得ることができれば幸いである。

## (1) 9世紀における北方世界の交流

### 交易港としての秋田城の時代

『続日本紀』天平5(733)12月己未条には、それまで庄内にあった出羽柵を、さらに北の秋田村高清水岡(雄物川河口)に遷すことがみえる。こうして置かれた秋田城は、早くから渡嶋エミシ(北海道の擦文文化集団)による朝貢の場となっていた。

(史料1)『続日本紀』宝亀11年(780)5月甲戌(11日)条

(上略)出羽国に勅して曰く、「渡嶋の蝦狄、早く丹心を効し、来朝・貢献すること、日、稍久し。方に今、帰俘逆を作し、辺民を侵擾す。宜しく將軍・国司賜給の日、意を存して慰諭すべし」と。

渡嶋エミシの出羽来朝は、「早く丹心を効し、来朝・貢献すること日稍久し」と、この時点ですでに開始から歳月が経過している。出羽柵北進自体が、北海道方面との交流を強く意識して実行されたものである可能性もあろう。

一般に、原初的な国家に伴う長距離交易は、政治的・社会的な諸関係に埋め込まれた管理交易という形態をとる。K. ポランニーはその拠点を「交易港」と名づけ、長距離交易の安全性を保障する普遍的な装置であるとした(『人間の経済』)。古代北方交易の文脈において、城柵は一面でこうした交易港としての役割を有した(蓑島 2001)。

(史料2)『類聚三代格』延暦21年(802)6月24日太政官符

私に狄土の物を交易するを禁断する事

右、右大臣の宣を被るに倂く、渡嶋の狄来朝の日、貢ぐところの方物は、例、雑皮を以て

す。而るに王臣諸家、競いて好き皮を買い、残るところの悪しき物を以て官に進めんとす。仍て先に符を下して禁制すること已に久し。而るに出羽の国司、寛縦にして曾て遵奉せず。吏たるの道、豈にかくの如くあるべけんや。自今以後、厳かに禁断を加えよ。如しこの制に違わば、必ず重科に処せん。事は勅語に縁り、重ねて犯すことを得ざれ。

ここには、9世紀初頭の出羽における渡嶋狄の朝貢交易の様相が具体的に描かれている。来朝の場は秋田城とみてよい（関口1987）。中央の王臣家（王・貴族層）がしきりに秋田城に使者を派遣して「雑皮」（さまざまな毛皮）などの良品を先に購入してしまい、官には残った粗悪なもののみが収められるという私的取引の横行が問題視され、禁制されている。「雑皮」の内実については、次の史料が参考となる。

（史料3）『延喜式』民部下・交易雑物

出羽国〈熊皮廿張。葦鹿皮。独犴皮。数は得るに随う。〉

「熊皮」はここではヒグマ皮であろう。『日本書紀』斉明4年（658）是歳条で阿倍比羅夫は「肅慎」（オホーツク文化か）から「生熊二・熊皮七十枚」を入手している。「葦鹿皮」はニホンアシカの皮であろうか。「独犴皮」は諸説あるが、「どっかん」＝アイヌ語でアザラシを意味する「トゥカラ」、いわゆる「トッカリ」の転で、アザラシ皮（水豹皮）の可能性が高い（武廣2004）。『日本後紀』弘仁元年（810）9月乙丑条に「独射犴皮」がみえ、9世紀初頭には流通していたらしい。これらが上記の「雑皮」の具体的な内容になるのであろう。

エミシ社会の特産品の重要性から、9世紀の陸奥・出羽においては、調庸物を全額エミシとの取引に充て、特産品の入手を目指すという特殊な国制が成立し、そのことは「帰来狄徒毎年数千」という状況（『類聚三代格』貞観17年（875）5月15日官符）を招いていた（鈴木拓也1998）。出羽国の支配・統治における狄禄の重要性は最近も強調される（十川2017）。しかも上記のごとく、9世紀初頭には、秋田城での取引は朝貢・饗給のみでなく、王臣家や富豪層の経済活動を内包するものとなっていた。この点は、とりわけ次代への伏線として軽視できない。

そもそも当時の奥羽では、王臣家らによるエミシ社会との取引活動は普遍的であった。

（史料4）『類聚三代格』延暦6年（787）正月21日太政官符

応に陸奥按察使、王臣・百姓と夷俘との交関を禁断すべき事

右、右大臣の宣を被るに称く、勅を奉るに、聞くならく、王臣及び国司ら、争いて狄馬及び俘奴婢を買う。所以に、弘羊の徒、苟も利潤を貪り、良を略し馬を窃み、相賊なうこと日に深し。加以、無知の百姓は憲章を畏れず、此の国家の貨を売りて、彼の夷俘の物を買う。綿は既に賊に襖冑を着せ、鉄はまた敵の農器を造る。理に於て商量するに、害を為すこと極めて深し。自今以後、宜しく厳しく禁断すべし。如し王臣及び国司、此の制に違犯する者有らば、物は即ち没官せん。仍りて名を注して申上せよ。其の百姓は、一に故按察使従三位大野朝臣東人の制法に依りて、事に随いて推決せよ。

このように、8世紀末以来、奥羽では王臣家の使者や百姓（富豪層）らが広くエミシ社会との経済活動をおこなっていたが、遠方の渡嶋エミシとのあいだでは、彼らの交易は、朝貢・饗給の拠点である秋田城に寄生・便乗することによって可能となったのである。このことを一因として秋田城の交易は規模を拡大し、渡嶋エミシ＝北海道の擦文社会とのあいだの交易港としての存在感をさらに強めていく（蓑島 2001）。

こうした状況下、王臣家らは、秋田城の付近に資人などの常駐する何らかの拠点を有していた可能性が高い。同時期の太宰府では、「秩満解任之人」「王臣子孫之徒」らが「結党群居」する状況があった（『類聚三代格』 齊衡 2年 6月 25日 官符所引延暦 16年（797） 4月 29日 官符）ことも参考となる。そうした拠点の候補の一つとして、秋田市の後城遺跡 E 地区は、秋田城の海側（西）に隣接し、旧雄物川河口部に位置する 8 世紀頃の集落である。フィゴ羽口や携帯用砥石を出土し、秋田城と関連の深い集落と思われるが、多くの住居から、秋田城跡でも出土する、擦文前期の土器に似た横走沈線文土師器が出土する。ただし、これらの土器の年代は 8 世紀前半を中心とし、9 世紀には下らないとされる（高橋 1997）。また、秋田城の近隣には、8 世紀代の小阿地古墳群や、9 世紀後半の湯の川 F 遺跡など、優品の八花鏡や大刀などを出土する遺跡が点在する（津野 2011）。このような地域のエミシ首長と王臣家が関係を結び、拠点的な場が営まれていた可能性もあるのではないか。秋田城の交易港としての機能は、官衙付属の饗応施設だけでなく、付近の衛星的な交易拠点群を含みこんで考えるべきかもしれない。

最近、浜田久美子氏は、秋田城の存在意義は、対渤海などの外交の窓口としては必ずしも高く評価できず、むしろ多面的な北方交易の拠点だったと理解し、秋田城交易には藤原仲麻呂政権の関係者や東アジアの海商など多様な交易者が関与したと示唆している（浜田 2017）。大いに首肯される指摘であるが、この点に関しては別稿を期したい。

ところで、倭・日本による北海道方面との交流は、六国史では越・出羽（日本海側）が前面に出ているが、発掘調査の現状において、本州北部における 7～8 世紀頃までのエミシ関連遺跡は、八戸や三陸など太平洋側にむしろ目立つ。越・出羽を窓口とする王権・国家主導の日本海沿岸交流と並行して、在地社会レベルでは、続縄文時代以来の活発な太平洋側交流（陸奥の内陸・沿岸）が存在し、北海道社会との連絡を維持していたと思われる（蓑島 2001、樋口 2005）。ただし、8 世紀後半から 9 世紀初頭にかけて、三十八年戦争に伴う混乱などで陸奥側ルートが低迷する一方、日本海ルートとの拠点としての秋田城交易は規模と比重をいっそう増していく（蓑島 2001・2015）。

9 世紀の本州北部～北海道には、それまで海峡を越えて共通性の高かった土器型式について差異が広がる。またこの時期、本州北部における擦文土器の出土例はほぼ皆無に近い。三浦圭介氏のいう「津軽海峡分断」（三浦 1994）の状況を現出するのである。このことは、北海道社会と本州との交流が、秋田城交易に集約されていった結果、北海道社会と本州北部社会との伝統的・在地的な交流が低調となったことに起因するのであろう（蓑島 2001）。

渡嶋エミシが秋田城交易に傾斜していた様子は、9 世紀末の元慶の乱に際しての渡嶋エミシの動向からも知ることができる。

(史料5)『日本三代実録』元慶3年(879)正月11日条

又た渡嶋の夷の首百三人、種類三千人を率いて、秋田城に詣り、津軽の俘囚の賊に連ならざる者百余人と、同じく共に聖化に帰慕す。若し勞賜せずば、恐らくは怨恨を生ぜん。是に由て従五位下行権介藤原朝臣統行・従五位下行権掾文室真人有房及令望・滋実・貞額等を遣わして勞饗せしむ。

ここでは、元慶の乱に際して、「夷首」(首長層)103人に率いられた渡嶋エミシたちが、3000人という規模での共同朝貢をおこなっている。秋田城交易の成立から長期間が経過し、渡嶋エミシはこれへの依存を深めていたことが推察される(中村1989、樋口1996)。

また、先述のように、秋田城交易の「一極的」な拡大は、従来の津軽海峡を結ぶ在地レベルの自生的な交流を阻害・抑圧していた。したがって、元慶の乱には、秋田城中心の対北海道交易を打破し、自らネットワークの中心たらしめとする、津軽など北奥羽のエミシたちによる抵抗という一面もあった可能性がある(蓑島2001)。

## 9世紀擦文社会の展開

以上のような背景のもとに進展した日本社会との交渉は、北海道社会に一定の身分階層を生成させる契機となった。江別市・恵庭市では早くから「北海道式古墳」の存在が知られ、その類例の「周溝墓」も千歳市・恵庭市で検出されている。最近、札幌市(北海道大学構内)でも「古墳」が出土した。これらには主として8~9世紀前半の年代が想定されている。被葬者の性格をめぐって、階層分化の程度や、本州からの渡来者か、北海道在来の人々かななどの問題が議論される。文献史料からは、先述の、元慶3年(879)、「渡嶋夷首百三人」に率いられた「種類三千人」が秋田城へ朝貢した例が目される。遅くとも9世紀末の擦文社会には複数の首長層・族長層が析出されていたことを知りうる。彼らが「古墳」の被葬者と関連する可能性もある(関口1985)。

この時期、「古墳」を含む北海道の墓からは、しばしば鉄製刀剣類が出土する。それらの多くは現地社会の有力者に対して王権・国家から与えられたものであろう。とりわけ、「古墳」では伝統的な土壙墓よりも刀剣や鉄器の保有率が高い傾向にある(越田2003)。「古墳」が一部の限られた地域にしか造営されていない点もあわせて留意される(鈴木靖民1996)。

7世紀後半以後、王権・国家との交渉が定例化すると、本来は自生的な社会慣行にもとづいていた流動的な地位・身分が固定化に向かい、さらなる階層分化を促進するのであろう。王権・国家による叙位・任官も、地域社会での威信・実力に転化したとみられる。上記の「渡嶋の夷の首」のような人々は、対外交易を協同・連帯して実施するのみならず、交易品となる生産物の集約や、対価としての必需財(鉄・布・塩・酒など)および威信財の流通・再分配のために、相互に日常的なネットワークを形成していたであろう。

近年、道央の擦文遺跡、しかも本州系の希少財を出土する遺跡において、オホーツク土器の出土例が散見される。千歳市ウサクマイN遺跡では、富寿神宝(818年初鑄)2点が包含層から出土し、河道跡からオホーツク文化の貼付文土器が出土した。恵庭市茂漁8遺跡では隆平永宝(796年初鑄)が出土し、同遺跡からオホーツク刻文土器を模倣した土器が出土している。一方、オホー

ツク文化の遺跡でも本州系の遺物が出土する。最近、道東の根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群では糸切り底の高台付須恵器皿（9世紀中～後葉の男鹿市海老沢窯跡群製品）が出土している（北海道埋文2015、鈴木琢也2016）。また、斜里町ウトロチャシコツ岬上遺跡では神功開宝（765年初鑄）が出土した。このような遠隔地にまで到達した本州系遺物は、いずれも擦文文化を中継して入手されたのであろう。

これらの事例は、8～9世紀の秋田城交易を媒介に、擦文社会とオホーツク社会とが緊密な関係で結ばれていたことを示唆する。道央擦文集団の首長たちによるネットワークの外縁には、オホーツク社会の首長層も連なっていたのであろう。擦文前期の道央の首長層は、オホーツク文化圏を主産地とする毛皮類などを集約して、本州・日本側に出荷する中継交易を一つの主要な役割としていたのではないか。日本社会との交易が拡大するなかで、道央擦文集団を中核とする道内の萌芽的な地域間分業が生成しつつあった可能性がある。とすれば、上記の朝貢が記録された9世紀末には、多数の「夷の首」の間にも一定の序列があったかもしれない。ただし、それら相互を調整する合議のようなシステムは存在したとしても、卓越した有力首長は通常時には不在であったろう。こうしたなかで、本来、サハリン・大陸側との交流に基盤を有していたオホーツク文化は、次第に本州と結び付く擦文文化との交流に軸足を移していくことになる。

このような状況のみられた9世紀は、北海道史・アイヌ史の全体を通じて、階層化と社会統合への動きが最も明瞭な時期であった可能性がある。

## 9世紀の北方ユーラシア大陸との「北周り」交流

ここで、大陸との交流の変遷にも目を向けたい。7～8世紀の北海道では、オホーツク文化を介して、靺鞨など大陸勢力との間に盛んな交流が存在した（菊池1995）。「北周り（北回り）」での交流、すなわち「サハリン・ルート」の実在を示唆する。ところが9世紀代の大陸系製品は、北海道ではほとんど出土しない。その背景を、渤海の盛衰を通して考えてみたい。

7世紀末、北東アジア地域の南部には渤海国家が成立する。そのなかには、旧高句麗領や粟末靺鞨・白山靺鞨などのように、農耕の比較的発達した地域も含まれるが、全体として、生業における狩猟・漁撈の比重の大きさは否定しがたい。こうした社会構造に立脚した渤海では、必然的に、対外交易がすこぶる重要な位置を占めることになった。

鈴木靖民氏は、史料上の渤海の「首領」の実態を、靺鞨人による在地首長層と推定し、渤海国家の基層に「首領制」が存在することを提起した（鈴木1979）。これを継承・発展させた李成市氏は、渤海は靺鞨人の首領（首長）層が独自に有していた対外交易権を管理・統制することで国家支配を実現しえたという仮説を述べた（李1998）。すなわち、渤海国家は靺鞨系の集団を支配下に包摂すると、その集団が本来有していた伝統的な交流・交易を規制した。しかしながら、靺鞨の人々の生業において必要不可欠な対外交易を、何らかの形で代替しない限り、彼らを円滑に支配していくことは不可能であった。そこで渤海は、靺鞨の多数の在地首長層である「首領」層を日本や唐との国家的外交のなかに組み込むことで、支配下の靺鞨人の交易活動を保障しようとした、という枠組みである。

719年に即位した第二代渤海王・大武芸は、「大土宇を斥け、東北の諸夷畏れてこれに臣す」（『新

唐書』渤海伝) とされる。さらに第三代・大欽茂の治世である 750 年前後には、それまで独自に唐と外交していた多くの靺鞨集団による唐への来朝記録が途絶えていく(『新唐書』黒水靺鞨伝、『冊府元龜』)。「後に渤海盛んたると、靺鞨皆なこれに役属し、復た王会に与らず」(『新唐書』黒水靺鞨伝) と評されるような状況が進展するのである。

その一方で、「もっとも勁健」とされた黒水靺鞨を中心として、北方のいくつかの靺鞨集団は、渤海に服属せず、独自の活動を継続していた。黒水靺鞨は、「大曆世凡七、貞元一來、元和中再」(『新唐書』黒水靺鞨伝) と、大曆年間(766-779)、貞元年間(785-805)、元和年間(806-820)においても自主的な外交・朝貢活動が確認される。唐との関係は、多量の朝貢品(毛皮類など)の需要を引き起こし、そのため黒水靺鞨はオホーツク文化など近隣の諸集団との関係を重視したと思われる。すでに、640年に「流鬼」(サハリンのオホーツク文化説が有力)が唐に朝貢した際にも「貂皮」を朝貢している(『新唐書』流鬼伝)。また、北部靺鞨の弘涅部が唐にもたらした珍品として「鯨睛」がある(『新唐書』黒水靺鞨伝)。これはクジラの眼球の水晶体と解されており、海獣狩猟を盛んにおこなっていたオホーツク文化の所産である蓋然性がある。

要するに、渤海との対抗関係を背景として、黒水靺鞨は周辺のアホーツク海域などへの影響力を保持しようとし、入手した特産品を唐などとの外交・交易に用いたのである。これにより、7・8世紀にかけて、アホーツク文化にとって黒水靺鞨はその重要な後ろ盾であり続けた。考古学的に、8世紀までのアホーツク文化に大陸系の物質文化の痕跡が多いことは、このような事情によるものであったと思われる。

ところが、サハリンや北海道などの列島北方地域において、北方ユーラシア大陸との結びつきを示す考古学的な徴証は、9世紀にはきわめて希薄となる(山田ほか1995)。アホーツク文化と靺鞨とのパイプは、この時期に急速に弱化したと考えざるを得ない。

その要因は、9世紀初頭の第十代渤海王・大仁秀(在位818-830)による北部靺鞨征服にある可能性が高い。『新唐書』渤海伝には、(大仁秀は)「頗るよく海北諸部を討伐し、大境宇を開くに功あり」とされている。黒水靺鞨による唐への朝貢の記録についても、元和年間(806-820)を最後に史上から消える。これは、まさしく大仁秀の治世にあたる。渤海に長く抵抗を続けていた黒水靺鞨は、この時期に渤海に屈服を余儀なくされたのであろう。

それは、アホーツク文化が重要なバックボーンとしていた大陸方面との伝統的なつながりを喪失したことを意味した。こうした事情は、アホーツク文化が擦文文化との関係に軸足を移す糸口となり、9世紀後半頃からはじまる変容(標津町伊茶仁カリカリウス遺跡など)の背景となった可能性がある。

## (2) 10～12世紀における北奥羽と北海道との交流

### 青森県域を拠点とする北方交流の再編

10世紀は、北海道一本州間の交流における大きな転換期であった。100年以上にわたり津軽海峡を越える交流の幹線であった秋田城での朝貢交易システムは、878年に勃発する元慶の乱を契機として瓦解する。

その直後、9世紀末には青森県五所川原市の須恵器窯群が成立し、10世紀中葉には岩木山麓の製鉄遺跡群が操業を開始する。北方の新たな生産・流通拠点として、青森県域が著しい発展をみせるのである（三浦1994）。五所川原産の須恵器は、北海道の道北や道東にまで及ぶ分布を示している（鈴木琢也2004・2006）。一方、10世紀中葉頃から、青森と秋田北部で擦文土器の出土例が急増する（斎藤2002など）。また、青森を中心に、岩手北部・秋田北部・北海道道南の一部では、壕や土塁を有する「防御性集落」が形成される（三浦1995）。「防御性集落」の多くで製鉄の痕跡や擦文土器の出土がみられ、こうした遺跡は生産・交易の拠点でもあったと推察される。とりわけ、のちの「外ヶ浜」に位置する青森市石江遺跡群（青森市新田（1）・同（2）遺跡など）は、木簡や木製祭祀具を含む多量の木製品などを出土し、国家支配の末端との関わりを含めて、当時の北方世界における位置づけが議論となった（斉藤利男2006・2011、鈴木靖民2014、木村2014、小口2014）。

いずれにせよこの時期、北海道社会は北東北の生産・交易拠点とよりダイレクトに接合する。津軽海峡を越える交易・交流のチャンネルの多元化と、本州財のさらなる殺到によって、道内の交易システムと社会秩序は大きく再編されていく（蓑島2001）。

要するに、秋田城交易の時代を通して擦文社会で成長を遂げていた首長たちは、元慶の乱を契機に、9世紀末～10世紀に秋田城交易体制から離脱することになり、新たに、青森県域のエミシ社会と社会的紐帯を結びなおす必要性に迫られた。ただし、その道のりは必ずしも平坦でなかった可能性が高い。

（史料6）『日本紀略』寛平5年（893）閏5月15日条

十五日壬午、出羽国の渡嶋狄、奥地俘囚らと戦闘を致さんと欲するの奏状に依り、国宰に仰せて、城塞を警固し軍士を選び練らしむ。

当時、津軽海峡を越える地域社会相互の關係に軋轢が生じていたことをうかがわせる。朝貢交易の時代から次の交易体制の時代へ、安定的な關係構築にはいまだ紆余曲折が必要な段階が存在したことが推察される。ところがその後、10世紀前半の史料には、

（史料7）『貞信公記抄』天慶2年（939）5月6日条

出羽国の馳駈使來る。其の解文に云く、「賊徒、秋田郡に到來し、官舎を開き、官稻を掠取し、百姓の財物を焼亡す。又た異類を率いて來るべし云云」と。

とあり、天慶2年（939）5月に発生した出羽俘囚の乱において、秋田郡に乱入した俘囚たちは「異類を率いて來るべし」と称したという。後述するように、この「異類」に中世的「エゾ」の源流という評価（斎藤1996）がある一方、ここではエミシ・俘囚と「異類」と称される人々との連帯がうかがわれることに留意したい。このことは、9世紀末から10世紀初頭にかけて、津軽海峡を越えるネットワーク再編の試行錯誤の時期があり、10世紀前半には、新たな結合關係が生じていたことを示唆する。本州北端からの擦文土器の出土例が10世紀に増加することとも



符合する。9世紀末から10世紀初頭にかけて、津軽海峡を越える交流・交易のネットワークを更新するため、従来の朝貢システムとは異なる新たな形態・原理が模索された段階のあることが推測されよう。

### 安倍氏・清原氏～奥州藤原氏の時代の北方交流

12世紀の奥州藤原氏の時代、平泉は奥大道によって津軽外ヶ浜と結ばれていた。平泉政権は、外ヶ浜地域（先述の青森市新田（1）・同（2）遺跡などが候補か）を外港として、北方世界との活発な交易をおこなった。後述のワシ羽やアザラシ皮をめぐる文献の記述からも、奥州藤原氏はその権力の基盤の一部を北方との交易に置いていた様子を垣間見ることができる。近年、厚真町宇隆1遺跡で出土していた壺が、12世紀代の愛知県の常滑製品であることが判明した。当時、常滑製品の最大の消費地は平泉であり、また、常滑壺は経塚の外容器として用いられたため、平泉政権とのかかわりで厚真町に経塚が造営されたことを想定する意見もある（八重樫2012、斉藤2014など）。同じく厚真町の上幌内2遺跡5号墓（13世紀の土壌墓）から出土した銅鏡（12世紀の秋草双鳥文鏡）などの副葬品も平泉との関係で入手された可能性が高い。一方、平泉において、2017年度の無量光院地区の調査で擦文土器が出土したことも（『岩手日報』2018年3月7日）、平泉と北海道とのつながりを改めて示唆することになった。

清原氏については、永保3年（1083）年に陸奥守として赴任した源義家を清原真衡が饗応（三日厨）した際に、

（史料8）『奥州後三年記』永保3年秋

源義家朝臣、陸奥守になりてにはかにくだれり。真ひら、まづたかひのことをわすれて、新司を饗応せんことをいとむ。三日厨といふ事あり。日ごとに上馬五十疋なむ引ける。其ほか金・羽・あざらし・絹布のたぐひ、数しらずもてまいれり。

とある。ここに「羽」（ワシ羽であろう）や「あざらし」のような北海道産品が含まれている点から、遅くとも後三年合戦の時期には、清原氏が北海道方面につながる交易の利権を押さえていた蓋然性は高いといえる。

ただし、延久2年（1070）年のいわゆる「延久蝦夷合戦」において、陸奥守源頼俊は、清原真衡（あるいは「貞衡」）らとともに、「衣曾別嶋の荒夷」（エゾノワケシマ）および「閉伊七村の山徒」など「三方の大（敵）」を討ち随えたという（延久3年の「左弁官下文」（『朝野群載』巻11）および応徳3年（1086）の「源頼俊申文」（『平安遺文』4652）。この合戦については、本州北端まで郡郷制が及んだ画期として重視する見解があり（入間田1997）、その背景には後三条天皇による強い意向があったともみられている。とすれば、清原氏が北方世界に影響力を伸ばすようになったのは、この合戦以後のことであるとも考えられる。

一方、これに先立つ安倍氏の時代において、「奥六郡」から北方の権益につながるルートが存在していた可能性も否定できない。安倍氏の北方世界への関与については、必ずしも明瞭な証拠がなく、その度合いには見解が分かれている。

齊藤利男氏は、膨大な木製品、とくに祭祀具などを出土した先述の青森市新田（1）遺跡の様相を公的権力とのかかわりでとらえ、ここが鎮守府や安倍氏につながる政治的・経済的拠点であったし、10世紀中葉には安倍氏が北方交易を押さえて台頭していたと推測している（齊藤 2006・2011 など）。こうした指摘に対しては、新田（1）遺跡や遺物の性格について、在地性を強調する立場からの反論がなされ、活発な議論が繰り広げられた（クライナー・小口・吉成編 2010 など）。この問題の決着は必ずしもついていないが、その後、五所川原市十三盛遺跡など、新田（1）遺跡と似た木製品や祭祀具の出土状況をみせる遺跡が他にも存在したことが明らかとなっており、新田（1）遺跡が北方交易を一極的に管掌する卓越した拠点であったとは必ずしもいえない状況となっている。ただし、新田（1）遺跡や十三盛遺跡などが当該期の重要な交流拠点であること自体は間違いなく、その機能や意義は今後も検討されていく必要があるであろう。

また近年、八木光則氏は、従来 12 世紀初頭まで存続すると考えられていた北奥羽の「防御性集落」（「囲郭集落」）について、これらの遺跡の衰退・廃絶の時期は 11 世紀前半に遡ることを推定している（八木 2011）。このことは、「安倍氏の平和」による「防御性集落」の時代の終わりを意味する可能性が高く、遅くとも 11 世紀前半には、安倍氏が北方世界と密接にかかわっていたことの傍証となる。

おそらく、すでに 10 世紀代には外ヶ浜地域と奥六郡とのあいだに「プレ奥大道」的なルートが形成されており、そのことを背景に、安倍氏は北海道など北方世界の産物の交易にも深く関与して、権力の基盤の一つとしていた蓋然性は高いものと思われる。

この問題を考えるうえで、本州における擦文土器の出土状況に関する研究にも留意される。先述のように、10～11 世紀には、本州北端でも多くの擦文土器が出土するようになる。斎藤淳氏の分類（2002）に従うと、まず、口縁部から胴部上半までの多重横走沈線が顕著な土器（北奥Ⅰ類。斎藤編年で 9 世紀後葉～10 世紀中葉）が、下北半島および陸奥湾沿岸からわずかながら出土する。次いで、多重横走沈線を地文に刻線文が発達し、明確な口縁部の文様帯がみられる時期の土器（北奥Ⅱ類。斎藤編年 10 世紀前葉～後葉）は出土例がやや増加し、下北半島と、岩木川中下流域（のちの津軽西浜）を中心に分布する。この類型のものは、のちの「外ヶ浜」地域にはほとんどみられない。

陸奥湾沿岸の「外ヶ浜」地域からの擦文土器の出土は、地文としての多重横走沈線が消失する時期の土器（北奥Ⅲ類。斎藤編年 10 世紀中葉～11 世紀前葉）に偏りをみせている。斎藤氏は、先述のⅠ類の分布状況から、本州における擦文土器の初現として、北海道の道南から下北を經由し、陸奥湾沿岸へ至る文化の流れがあったことを想定し、その延長にⅢ類の分布状況を位置づける。これは、「外ヶ浜」を窓口とする交易の展開の想定によく合致する。Ⅲ類土器にみられる貼付圍繞帯（馬蹄状圧痕）をもつ土器は、北海道の道南・道央（太平洋側）中心に分布することが知られ、瀬川拓郎氏はこれを共有する地域に「太平洋交易集団」の存在を推測している（瀬川 2007）。また、北海道の太平洋側を中心として、銅鏡の出土例が増加している（関根 2008、蓑島 2012a、および後掲図 2・表 1 参照）。この時期の北方交流を考えるうえで重要である。

その一方で、口縁部のみに横走沈線をもつ土器（北奥Ⅳ類。斎藤編年 10 世紀後葉～11 世紀中葉以降）と、口縁部に横走沈線を巡らせただけの無文的な土器（北奥Ⅴ類。斎藤編年 10 世紀中

葉～11世紀中葉以降)は、むしろ岩木川流域を中心とする津軽西浜、日本海沿岸に多く、岩木川上流域の碓ヶ関村古館遺跡や、大館市上野遺跡など秋田県北部にも及んでいる(V類は陸奥湾沿岸にも分布する)。斎藤氏のいう北奥Ⅳ・Ⅴ類の土器は、北海道では主として道南日本海側の遺跡(奥尻町青苗遺跡など)に分布するもので、瀬川拓郎氏はこの地域に擦文文化と本州との境界的文化としての「青苗文化」を設定している(瀬川2005・2007)。「青苗文化」の土器は、日本海沿岸の擦文土器にしばしばみられる坏底部の刻印を共有することから、瀬川氏は「青苗文化」を仲介とする「日本海交易集団」の存在を推定する。

このように、考古学からは10世紀中葉以後において、「外ヶ浜」「プレ奥大道」ルートの交流だけでなく、日本海沿岸交流の实在と比重の高さも指摘されており、留意する必要がある。

斎藤淳氏は、10～11世紀前半の北奥羽における「区画集落(「防御性集落」)」の時代について、当該期の「擦文(系)土器急増の背景には、律令体制の弛緩にともなう北奥の政治再編の始まりと、私交易あるいは渡航・越境の自由化など、自由(あるいは無秩序)な交易の隆盛が見て取れるのである」とし、このような比較的「自由」な秩序は、「安倍・清原、あるいは藤原氏といったより広域を支配する豪族の台頭とともに十一世紀半ばころには終焉を迎える」と述べて、これを「渡航・越境を制限する統制的交易」と表現している(斎藤2011)。こうした見通しを妥当とすれば、津軽海峡をまたぐ交流の多元的で錯綜した状況は、朝貢型の交易が後退し、安倍氏による広域的な秩序の成立が想定されるまでの、およそ10～11世紀前半の時期に限られる、特殊な現象ということになる。

ただし、この時期の北方交流の実態については、上記の設定とはいささか異なる新たな要素を加味して考える必要もある。例えば、11世紀成立の『新猿楽記』において、「東は俘囚の地」から「西は喜賀が島」まで往来する「商人の首領」八郎真人は、「本朝物」「唐物」各種の交易品を扱ったとされ、「本朝物」のひとつには北海道産と考えられる後述の「鷲羽」がみえる。こうした新たな交易者たちの動向と、安倍氏・清原氏・奥州藤原氏らとの関係も大きな課題である。入間田宣夫氏は、12世紀の北方世界において、平泉による一元的な押さえを想定する意見(斎藤2014など)を批判し、列島中央部につながる多種多様な交易者および宗教者(「叡山勢力」などの布教・勸進僧)の活動に光を当てるべきだとしている(入間田2018)。このように、古代末から中世初において、北奥羽の政治権力による北方交易の管理・掌握の度合いについては、いま単純に結論を出せる状況にない。ここではいったん判断を保留し、後考を期したい。

## ワシ羽がむすぶ日本とアイヌ

10世紀以後の列島北方史を大きく左右した重要な交易品として、近年の研究で脚光を浴びているのがワシ羽である。

北海道では、冬になると各地で、越冬のためシベリアから渡ってきたオオワシやオジロワシの姿をみることができ(オジロワシの一部は留鳥になっている)。なかでも、知床や根室・釧路など道東地方には多く飛来する。これらオオワシやオジロワシの尾羽(一般にワシタカ類は12枚、オオワシは14枚)は、幼鳥の頃には複雑な斑紋を有するが、成長するに従い白さを増していく。そして、この多彩な紋様への愛好も手伝って、オオワシ・オジロワシの尾羽は、古くから日本社

会で最高品質の矢羽として珍重されてきた。

幕末の玉蟲左太夫『入北記』によると、根室・釧路産のオオワシ尾羽（14枚）は、上質なものは「一把」（10羽分＝140枚）につき銭2貫以上の値がついている。近世においても、北海道を代表するワシ羽の産地は道東地方であった。

さて、鎌倉中期の権僧正・公朝による文永2年（1265）の歌には、

（史料9）『夫木和歌抄』巻27（第895番）

みちのくの えぞがちしまの 鷺のはに たへなるのりの もじもありけり

と詠まれている。ここでは、「エゾ」の地からもたらされるワシ羽の複雑な紋様を、「妙なる法の文字」、つまりサンスクリット文字にみたとており、注目される。中世初期には、ワシ羽は北方の「エゾ」を代表する産物となっていた。

10～13世紀までの史料において、「鷺羽」は概算で67例を数える（類例の「雕羽」や、22例の「肅慎羽」など含む）。日本社会において、北方産のワシ羽の流通が確実となるのは10世紀以後である。『延喜式』伊勢太神宮や『西宮記』臨時6・外衛佐によれば、伊勢遷宮の際には、「神宝」として八百枚ものワシ羽が必要とされている。『小右記』や『玉葉』においても、ワシ羽はほとんどの場合、「神宝」として登場する。さらにワシ羽は、「肅慎羽」と並んで、賭弓や御禊行幸の場面に多く登場するようになる（『西宮記』臨時4・賭弓、『御禊行幸服飾部類』など参照）（蓑島2015）。

このように、北方産のワシ羽は当初、「神宝」としての意味合いが強く、また天皇や貴族社会の各種の儀式・行事において必要とされる例が多かった。しかし、やがて新興の武士階層によって、上質な矢羽としての需要がさらに増していくことになる。

中世の軍記物語は、華々しい場面で登場人物の身にまとう武具のディテールに大きな注意を払っており、矢羽もその例にもれない。例えば、『平家物語』巻9「敦盛最期」では、平敦盛の豪華ないでたちのなかに、「廿四さいたる切斑（きりふ）の矢」が描かれる。また屋島合戦の際に那須与一が平家方の海上の扇を射落とした鎬矢は、「うすぎりふに鷹の羽わりあわせてはいだりける、ぬための鎬をぞ差し添へたる」（『平家物語』巻十一「扇」）であった（薄い色の切斑二枚とタカの羽二枚を互い違いにまぜ合わせた四立羽の矢羽に、鎬は鹿角製）。武士たちは、晴れやかな舞台を演出する小道具として、矢羽になみなみならぬ関心を傾け、個性を競ったのである。

北海道産のワシ羽は、安倍氏・清原氏や奥州藤原氏などの奥羽の勢力にとって重要な交易品であった。奥州藤原氏の2代・基衡が、平泉の毛越寺の本尊造営のため、「金百両・鷺羽百尻」「水豹皮六十枚」（アザラシ皮）などの品々を京の仏師に贈ったことはよく知られる（『吾妻鏡』文治5年9月17日条）。『台記』仁平3年（1153）9月14日条には、左大臣藤原頼長による出羽国遊佐庄の年貢要求に対して、藤原基衡が「金十両・鷺羽五尻・馬一疋」などの品々を提案している。山形県遊佐町大楯遺跡から、「ほろは」と記した12世紀の付札木簡が出土している。「ほろ」は翼の羽で、矢羽としてのグレードは尾羽に劣るが、『台記』の記録とあわせて、北方産のワシ羽である可能性がある。

文治5年(1189)、源頼朝は奥州合戦によって奥州藤原氏を滅ぼす。『吾妻鏡』では、奥州合戦直後の文治5～建久4年(1193)にかけてワシ羽に関する記述が集中する。奥州を征服した「あかし」として、ワシ羽の存在が脚光を浴びたのであろう。文治6年(建久元年・1190)正月には頼朝から後白河院へ「鷲羽一櫃」が贈られ、同年11月にはやはり後白河院に対して、砂金八百両・御馬百疋とともに「鷲羽二櫃」が贈られている。これらは頼朝による奥州征服、北方交易ルートの掌握を誇示する政治的アピールにほかなるまい。またこの時期、鎌倉殿・将軍と御家人らが主従関係を確認する正月の垢飯では、しばしば御家人たちから頼朝や実朝に向けて多数のワシ羽が献上されている。「エゾ」を代表する産物としてのワシ羽は、鎌倉幕府成立期の秩序・世界観において、一定の政治的な意義を有した可能性がある(蓑島2015)。

先述のとおり、7世紀後半～8世紀頃、主として道南と道央に分布していた擦文文化の人々は、およそ10世紀以後、道北地方に分布を拡大し、さらに、常呂や網走、知床や標津、釧路、根室など、道東地方にも大規模に拡散していく。従来、その理由として海獣皮の獲得などが想定されていたが、瀬川拓郎氏や澤井玄氏は、これにワシ羽の入手がかかわっていた可能性を指摘している。継承すべき問題提起である。また、銅鏡の出土例が集中する太平洋側、とくに胆振東部・日高西部地方は、道東地方と本州北部をつなぐワシ羽交易の幹線に当たっていたという可能性も考えられる(蓑島2012a)

#### 地域間をつなぐもの

先述のように、10世紀には、秋田城の朝貢交易の役割が後退し、津軽海峡を直結する新たなネットワークの広がりが生じていた。ここでは、地域間の交流を媒介するものとして、精神文化の役割に着目し、近年増大している北方の祭祀関連遺物について検討したい。

井上雅孝氏(2002・2004・2006)は、古代北東北を中心に分布する「錫杖状鉄製品」について、「鍛造製で、頭部が左右に円環をなし、鉄輪を掛け、鉄鐸(筒状鉄製品)を装着」と定義し、形態からⅠ類(正面形タイプ)とⅡ類(断面形タイプ)に大別した。さらに、「仏具の錫杖と同一のものではなく、錫杖の全体的な形態を模倣し、かつそれに神道具の鉄鐸を簡略化し装着」したものであり、これを「神仏習合の雑密系祭祀具」と結論して、8世紀後半～11世紀前半の年代観を与えた。

一方、小嶋芳孝氏(2004)は、錫杖状鉄製品に伴う鉄鐸(筒形鉄製品)について、「古代北日本の筒形鉄製品は、舌を伴わない」(舌を有する西日本型鉄鐸と相違)＝むしろ北方ユーラシアの筒形鉄製品に似るとして、錫杖状鉄製品の系譜を、むしろ北東アジアに広がるシャーマニズムに関連した器具とし、「10世紀前後の北東北では、シャーマニズムと密教系仏教が融合し、蝦夷社会の固有宗教として展開していたのではないだろうか」とした。しかし、岩手県矢巾町高清水遺跡、青森県蓬田村蓬田大館遺跡出土錫杖状鉄製品の鉄鐸は舌を伴うことから、錫杖状鉄製品のルーツは本州由来とみて差し支えない(井上2006)。

入間田宣夫氏は、東北地方に分布する錫杖状鉄製品について、その「独自性」は否定できないとしつつも、これらの製品は基本的に南の宗教者たちが持った錫杖とみてよいのではないかとする(入間田2018)。しかし錫杖状鉄製品は、素材的にも形態的にも、地域的な分布も錫杖そのも

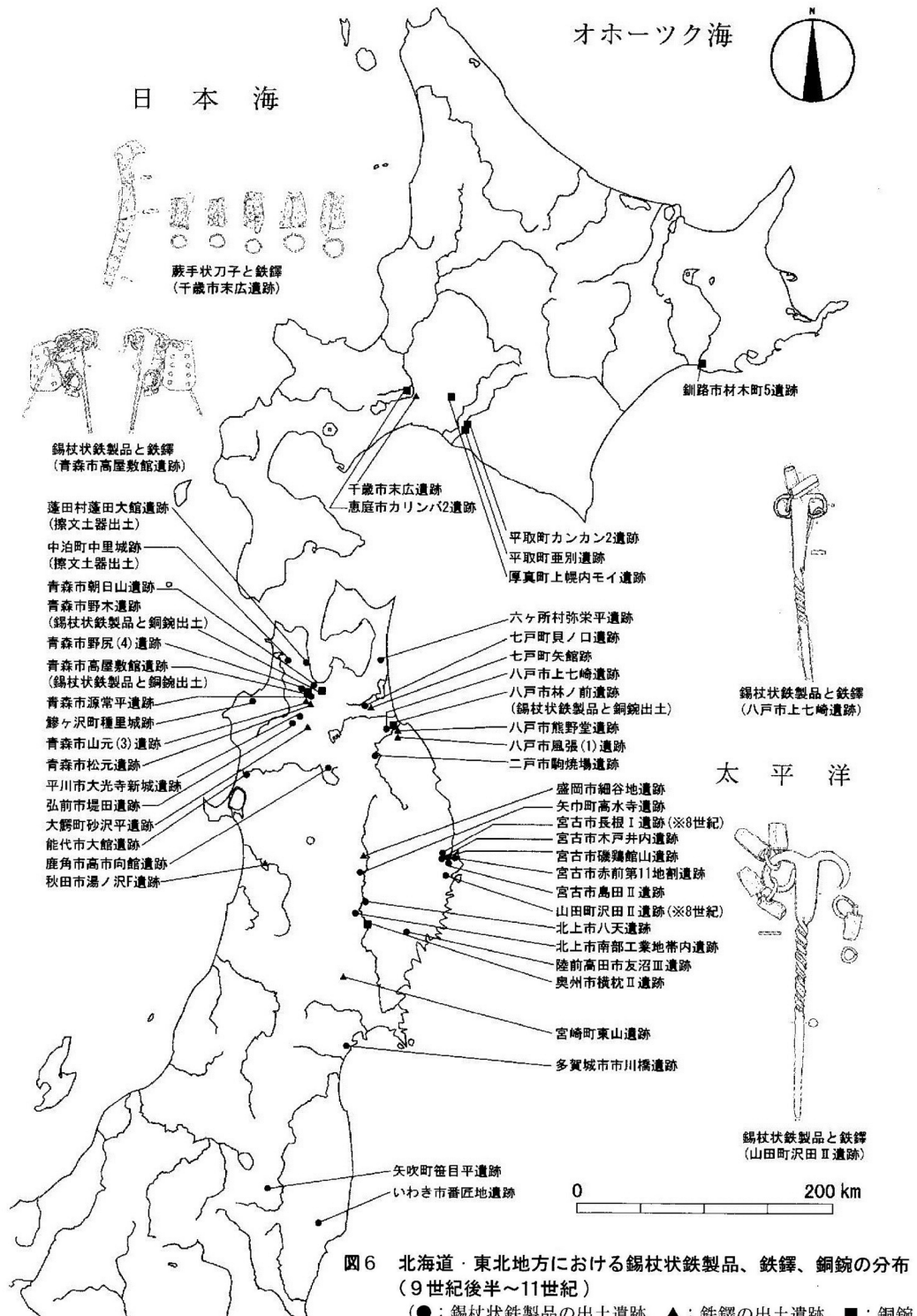


図6 北海道・東北地方における錫杖状鉄製品、鉄鐸、銅鏡の分布(9世紀後半~11世紀)

(●：錫杖状鉄製品の出土遺跡、▲：鉄鐸の出土遺跡、■：銅鏡遺跡。錫杖状鉄製品と鉄鐸の分布は、井上(2002・2004)をもととし作成。錫杖状鉄製品などの縮尺は、1/10。)

(図2) 鈴木琢也 2014 より転載

(表1)「表 各遺跡の文化要素の比較・対照」(蓑島 2012a) をもとに再検討

	五所川原 須恵器	銅鏡	銅鏡	祭祀	周溝遺構	錫杖状 鉄製品	コイル状 鉄製品	墨書・刻書 土器
青森市朝日 山(2)	○	×	○伯牙彈 琴鏡	○土師器片・須 恵器片・炭化 物・粃殻	○第216号 溝跡。方 形周溝 (墓?)	○	×	○
千歳市末広	○	×	×	不明	×	○	×	○
恵庭市カリ ンバ2	△	○破碎	×	不明	×	×	×	×
厚真町上幌 内モイ	○破碎	○破碎・ 被熱	×	○炭化イナキピ・ 擦文土器・銅 鏡ほか	○円形周溝	×	○	○
厚真町ショ ロマ4	△	○破片 12点	×	○? 集中区1 平地式住居と 同時期の捨て 場あるいは送り 場	△	×	△	△
平取町カン カン2	○	○破碎	×	○? 多量の鉄 製品	○方形周溝 (墓?)	×	△近隣の二 風谷遺跡 出土	×
平取町亜別	△	○破碎	×	不明	×	×	×	×
釧路市材木 町5	△近隣の幣 舞遺跡出 土	○破片	○湖州鏡	△(湖州鏡は火 災住居出土)	×	×	×	×

のとは異質であり、独自性・特異性を軽視できない。

井上氏は、錫杖状鉄製品の起源について、日光男体山山頂遺跡出土鉄製錫杖に全体の形態が類似し、付属する鉄製品も同遺跡から多く出土する鉄鐸を祖形とするとみられることから、雑密系修法をおこなった日光男体山を淵源・発信地として成立したとした。8世紀後半の長根Ⅰ遺跡(宮古市)、沢田Ⅱ遺跡(山田町房の沢遺跡付近)での出土例が最も古手であり、井上氏は、8世紀に関東で流行した雑密が太平洋沿岸ルートで早い段階に三陸沿岸に伝播したと推察する(9世紀前葉の茨城県石岡市鹿の子C遺跡で出土例)。これは文献上の「幣伊村」(閉村)に当たる地域であり、留意される。

内陸部での展開はやや遅れ、9世紀前葉～10世紀代に古代東山道ルート上(米代川流域～津軽地方まで)に拡大する。これを井上氏は、元慶の乱の戦後処理に伴うルート整備によるものと推定するが、基本的に首肯できる。錫杖状鉄製品は、10世紀代に「北東北で最後の隆盛期」(時枝2002)を迎え、11世紀前半代に衰退する。井上氏は、安倍氏の仏教信仰導入によって呪術的雑密信仰がしだいに駆逐された可能性があるとする(井上2006)。

近年、北海道でも錫杖状鉄製品の出土例が確認された。千歳市末広遺跡のIH-97 堅穴において、5点の筒状鉄製品(4点は一括出土)と、「刀子の未成品か」と別々に報告されていた鉄器(千歳市教委1985)が、セットで錫杖状鉄製品(Ⅱ類)となることが判明した。IH-97は、一辺約5mの隅丸方形プランのカマドつき堅穴住居で、焼土、鍛打滓から小鍛冶関連遺構と思われ、堅穴および周辺から鉄製品や鉄滓、羽口が出土している。946年のB-Tm 降下直後に掘開された堅

穴であり、カマド出土のロクロ土師器坏、擦文甕などから、10世紀中葉～後葉と考えると矛盾ない。Ⅱ類の錫杖状鉄製品は、井上編年で9世紀前半のタイプとなり、堅穴の年代と合わないが、井上氏は、10世紀後半の津軽に分布する「蕨手状刀子」が錫杖状鉄製品と関連する可能性を指摘しており（井上2002）、Ⅱ類の錫杖状鉄製品が実際には10世紀後半まで後続した可能性がある。

一方、銅鏡は、『枕草子』第三十九段「あてなるもの」（高貴なもの・上品なもの）に、「削り氷にあまづら（甘葛）いれて、あたらしき金椀（かなまり）にいれたる。」とされており、貴族層の高級食器として用いられたが、仏具としての性格も色濃い。

仏具としての鉢・鏡と錫杖のセット関係については、『性霊集』巻第3・16「恩賜百屯の綿兼ねて七言の詩を奉謝する詩」に、「方袍苦行す雲山の裏 風雪情け無うして春の夜寒し 五綴・錫を持して妙法を観ず 六年蘿衣して蔬漚を啜ふ」とあり、修行僧が山野で「五綴・錫」すなわち鉢と錫杖を携えて瞑想・修行していることが詠われている。

鏡と鉢を同列に扱ってよいかは問題であるが、鉢（鉄鉢）はしばしば銅鏡の模倣であったとされるので（原1996）、ここではひとまず共通性の高いものとして取り扱う。

原明芳氏は、長野県を主たるフィールドとして、銅鏡は7～8世紀代までは古墳から出土する例が多いが、9世紀後半から11世紀にかけて集落遺跡から出土するようになるとする。当初、中央貴族層や地方豪族層の高級食器であった銅鏡は、9世紀には食膳具の頂点の座を施釉陶器に譲り、仏具としての性格を強め、とりわけ集落の有力者による現世利益的な仏教呪術の祭祀具となったと推測する（原1996）。

石川県羽咋市の寺家・福水ヤシキダ遺跡（9世紀後半）では、水場（井戸状遺構）近くの祭祀遺構から錫杖、銅鏡、三鈷鏡がセットで出土している。同様のセット関係は日光男体山山頂遺跡でも確認されている。三鈷鏡は青森県でも五輪野遺跡、山口館跡、蓬田大館遺跡、砂沢平遺跡から出土している。ただし、これらの遺跡においては寺家ヤシキダ遺跡や日光男体山山頂遺跡のようなセット関係は明瞭ではない。また、三鈷鏡の北海道からの出土例はない。

北海道内における銅鏡の分布は、恵庭市、厚真町、平取町、釧路市にまたがり、「太平洋沿岸交流」の存在を示唆する分布傾向をみせている（関根2008、蓑島2012a）。とくに、胆振東部～日高西部の厚真・平取からの出土例が増えている（表1）。

このように、錫杖状鉄製品、銅鏡のような祭祀関連遺物は、10世紀前後に津軽海峡を越える分布をみせる。先述のとおり、この時期は、秋田城を舞台とする朝貢交易が終焉し、『新猿楽記』の八郎真人をひとつの典型とするような、新たな「商業的」交易者たちの活動へと切り替わる過渡期にあたる。こうして生まれつつあった経済は、その成立を可能ならしめる価値観、イデオロギーの共有・広がりが必要とした蓋然性がある。銅鏡や錫杖状鉄製品から推察される、東日本～北奥羽に共有された祭祀・儀礼（具体的には雑密的呪術的信仰？）の広がり背景の一つには、そのような事情があったのではないか。銅鏡や錫杖状鉄製品が北海道の一部地域からも出土していることは、こうした祭祀・儀礼が津軽海峡を越える交流の媒介となった可能性をうかがわせる。とりわけ、銅鏡・錫杖状鉄製品の分布状況から、これらの祭祀・儀礼は、「外ヶ浜」と先述の「太平洋交易集団」を結ぶルートの交流・交易において重要であった可能性が高い。



## 祭祀・儀礼の伝播・受容の実態

ただし、このような祭祀・儀礼は、広域的な交流を媒介する役割を担った一方で、北海道社会内部への伝播・普及については、限定的・選択的であった側面も否めない。

鈴木琢也氏(2014)は、古代北日本の錫杖状鉄製品・鉄鐸と銅鏡をセットとしてとらえ、「密教(雑部密教)系の儀礼・祭祀具である可能性が高いものであり」「東北北部だけでなく北海道の太平洋沿岸域・石狩低地帯に流入している」と指摘するが、いうまでもなく、こうしたモノの流入が、それに伴う思想の伝播をどの程度反映するかは、簡単には評価できない。

先述の寺家ヤシキダ遺跡や日光男体山山頂遺跡では、錫杖、銅鏡、三鈷鏡がセットで出土しており、古代の東日本～北日本に広がった祭祀・儀礼のひとつの典型・指標を示すものといえよう。青森市野木遺跡や同高屋敷館遺跡、八戸市林ノ前遺跡では、錫杖状鉄製品と銅鏡がともに出土しており、上記のパターンから崩れてはいるが、一定のセット関係の存在を示唆する。しかしながら、北海道で出土する銅鏡は、現状で錫杖状鉄製品と伴わない。このことは、古代東日本に由来・淵源する「雑密系」儀礼具のセット関係とその背景にある思想が、どれだけ体系的に北海道社会に受容されたものだったか、疑問を抱かせる。

加えて、東北北部・北海道における銅鏡の出土状況にも留意される。擦文期の銅鏡はほぼ例外なく破碎を受け、被熱しているものもある(表1)。青森で出土する銅鏡・銅鏡も大半は破片資料であり、中澤寛将氏は破鏡に類する行為を想定している(中澤2017)。一方、日光男体山山頂遺跡で出土した銅鏡は、平安期のものを中心として185面を数えるが、そのうち小破片は10面に過ぎない(中川・降幡2014)。青森出土鏡との取り扱いの違いは際立っている。

日光男体山山頂遺跡では計13点の銅鏡・銅盤・銅鉢も出土している。完形のもののみはみられないが、それは長年の風雪等によるものであり、意図的なものとは思われない。また、これらの銅鏡には銚を打って補修した痕跡がみられる(日光二荒山神社編1963)。松本市三間沢川左岸遺跡の10世紀後半の竪穴から出土した銅鏡は、6片に分かれて出土しているが、これにも銅板をあて五箇所を銚で打った補修痕のある例がある(原1993)。銅鏡は、頻繁に補修して使用されるものであったことが推察される。

鑑真が将来した四分律には、先述の「五綴」に関する戒律がある(『仏光大辞典』「五綴」)。僧は、鉢が壊れても、欠損が五綴(長さの単位)に達するまでは(あるいは5回壊れるまでは)、補修して使わなければならないとするものである。ここから類推して、銅鏡を破碎する行為は、仏教的な鏡・鉢の取り扱いからかけ離れ、文脈が共有されていないことを示唆する。古代の北海道や青森県域において、それらの儀礼を直接執行した人物が、仏教思想を体系的に身につけていたとは考えにくい。すなわち、当時の津軽海峡世界では、仏具としての銅鏡とは違った意味、価値体系のもとで銅鏡が受容されていた可能性が高い。

青森市朝日山(2)遺跡第216号溝跡では、946年降下のB-Tmの上層において、破碎された伯牙弹琴鏡が炭化穀殻の上面で出土し、祭祀行為の存在を示唆する。また、当該遺構近くの住居床面では、錫杖状鉄製品が出土している。厚真町上幌内モイ遺跡では、円形周溝遺構に近い集中区(儀礼場)から炭化イナキビなどととも破碎され被熱した銅鏡が出土し(11世紀前半)、朝

日山 (2) の事例に類似する (蓑島 2012a)。やはり破碎された銅鏡が出土し、儀礼遺構の可能性がある平取町カンカン 2 遺跡の方形周溝 (10 世紀後半) も、これらと関連するものかもしれない。

これらはいずれも、東日本的・雑密的な祭祀者が関与した可能性を排除しきれないかもしれない。一方で、両者の様相には、ともに民族誌的なアイヌ文化におけるカムイノミ (神々への祈り) や「送り」儀礼を彷彿とさせる側面もある。この時期の青森や北海道には五所川原産の須恵器甕の流通がみられ、上記の 3 遺跡でも出土している (表 1)。こうした製品はおもに酒の貯蔵・醸造・運搬に使用されたと推測される (鈴木 2003)。とすれば、上記のような「祭祀」遺構では、アイヌの民俗事例につながるような献酒儀礼がすでにおこなわれていたという可能性も考えてみたくなる。当時の青森県域で擦文土器が出土することの意味にもさらなる追究の余地がある。これらの問題について現時点で即断はできず、今後の発掘調査事例の増大などを待つべき検討課題として残されるが、いずれにせよ、10～11 世紀の津軽海峡世界には、かなり独自の文化変容をとげた祭祀・儀礼が存在し、それらが共有され、交流を媒介していたという可能性が推察される。

憶測となるが、当時の北海道内に登場していた有力者・首長たちは、本州との経済交流の進展に連動して、対外的には本州由来の精神文化を受容し、祭祀・儀礼の場を共有したりして、南の社会との交流を実現しつつ、内向きには、それらの要素を選択的に受容しながら、独自の文化を維持し、洗練させていったのではあるまいか。10 世紀頃の北海道では、対外的な交流の増大のなかで、以下に言及する「コイル状鉄製品」のような独自の遺物が出現するなど、本州とは異なる様相も顕著となっていく。

### 「コイル状鉄製品」の検討

ここでは、「コイル状鉄製品」について、まず出土例を以下に集成する (出典を明示したものは報告書未掲載。明示していないものは報告書の記載による)。

- 新十津川村 254 番地 (1894 年出土) 38 点 墓? (三浦 2001)
- 千歳市美々 4 遺跡 15～17 世紀 1 点 墓
- 平取町二風谷遺跡 10～12 世紀 6 点 包含層
- 札幌市 K501 遺跡 11～12 世紀 5 点 包含層
- 常呂町ライトコロ川口遺跡 13～14 世紀 11 点 墓 (廃絶した擦文堅穴住居址内に造成。ガラス玉約 70 点)
- 余市町大川遺跡 14～15 世紀? 16 点 墓 (GP-4) ※明瞭なピットとして検出されず。ガラス玉 40 点共伴 (余市町教委 1990、菊池 1995)
- 厚真町上幌内モイ遺跡 10 世紀後半～11 世紀前半 1 点 集中区 26 ※炭化物集中・焼土
- 厚真町上幌内 2 遺跡 13 世紀 18 点 5 号墓 方形の堅穴状造成 ※12 世紀中葉の秋草双鳥文鏡、筒状銅製品など

以上のように、年代はおよそ 10～15 世紀にかけての期間にわたっており、分布はほぼ道内全域におよぶ。

上記のほか、道北の中川町安部志内川右岸遺跡の 2011 年度試掘調査において、近世アイヌの「もの送り場」と推定される遺構から、ガラス玉や赤漆膜片、カワシンジュガイ殻皮などとともに、

コイル状鉄製品?とされるものが2点出土し、放射性炭素年代測定などから18世紀後半の年代が示唆された(田才雅彦「附編 安部志内川右岸遺跡の試掘調査」中川町教育委員会編『オフイチャシ跡一測量・試掘調査報告一』2012年)。形態的に類似するものの、年代が余りにも離れている。18世紀後半にコイル状鉄製品が装飾品として普及していたならば、アイヌ絵や民族誌への記述、民俗資料などに類例がないのも不審である。ここでは、中川町出土資料について、「コイル状鉄製品」の範疇には含めないこととする。

「コイル状鉄製品」の用途は、初期に確認された常呂町ライトコロ川口遺跡出土例から、北方ユーラシア的、サハリンのシャーマンの腰帯の垂飾と関連づけられることが多いが、大川遺跡GP4の例から、近年ではタマサイ(アイヌ民族の首飾り)の一部としての用途が示唆されている。特に関根達人氏は、「鉄製コイル状あるいはラセン状垂飾が15世紀頃大陸・サハリンからもたらされた北方系遺物とする点に異論はないが・・・大川遺跡やライトコロ川口遺跡において、腰帯に付けるには多すぎる数のガラス玉と共伴している点に鑑みれば、タマサイの部品に転用されていたのではなかろうか」としている(関根2007)。最近の厚真町上幌内2遺跡における出土例から、首飾りとしての蓋然性はより高まった。

その起源についても諸説がある。三浦正人氏(2001)は、「イメージや思想を北方や大陸に求めつつも」「鉄を手に入れた擦文人がその象徴として、形態は北方や大陸を意識しながらも、実物を鉄という材質で成立させたのであろう」としている。

一方、関根氏(2014・2016)は、「コイル状鉄製品」は、同時期の鉄製腕輪を含めて、「ワイヤー製装身具」と総称すべきとする。さらに、中澤寛将氏の教示として、クラスキノ土城(8~10世紀)2010年第45調査区未報告資料にこうした遺物の類例があるとし、これらは「すべて15世紀以前の初期アイヌ文化期に限られる」「近世以前の日本の金工品にはワイヤーを素材とする装飾品はほとんど認められず、擦文文化にもそのような遺物はまったく認められない」として、アイヌ文化の形成(関根氏は通説に従い13世紀とする)に作用した「大陸からの文化的影響」であると結論する。

しかし、二風谷遺跡、K501遺跡、上幌内モイ遺跡の例はいずれも擦文期であり(主として10~11世紀頃)、コイル状鉄製品が擦文中期にはすでに出現していることの意味は重要であろう。また、北海道から出土するコイル状鉄製品を「大陸・サハリン・北方系」と断定することも現時点では躊躇される。先述のクラスキノ土城の例は、2010年に実施された第45次調査区の第5層から出土したもので、クラスキノ城址でも上層のおよそ10世紀前葉頃に相当する(この資料の出典に関して、蓑島も中澤氏から教示を受けた)。当該資料は、円柱状を呈し、頂部の耳がない。「さなぎ」状で耳をもつ北海道の「コイル状鉄製品」とは形態的に相違する。

さらに類例として、やや時期が早い、渤海期(8~9世紀)の虹鱒漁場遺跡(上京龍泉府から約6キロ)で出土している「鉄螺旋器」にも留意される(黒竜江省文物考古研究所2009)。やはり形態は円柱状で、頂部の耳もない。また、「鉄螺旋器」以上に「銅螺旋器」が目立ち、それらには筒状の銅製品に溝をつけたものが多い。

「コイル状鉄製品」の源流に迫るのは容易ではないが、少なくとも、大陸の金属製「螺旋器」とは形態差が大きく、モチーフとしての影響について想定之余地はあるにせよ、従来言われて

きたような大陸製品そのものの伝来を想定するのは難しいのではないか。「コイル状鉄製品」が擦文中期から中世（現状で上限は10～11世紀、下限は14～15世紀）にかけて用いられ続けていることは、擦文期と「アイヌ文化期」に連続する文化要素の一つとして注目される。分布の面でも、道央部だけでなく、日本海側やオホーツク海沿岸に及ぶ道内全域に及んでいる。これについて、古代～中世の北海道・アイヌに固有の、近世以後のアイヌ文化には継承されなかった装身具（祭祀具の可能性を排除できない）として位置づけるべきではないか。

このように想定した場合、生産地が大きな問題となるが、後世、「蝦夷拵」のエムシ（刀）など、「アイヌ好み」の本州製品が特注されていたことをヒントにすると、コイル状鉄製品が青森の製鉄遺跡などで北海道向けに生産されたという可能性も排除できない。一般に大陸系とされてきたオホーツク文化の曲手刀子について、形態は大陸的であるが素材は本州製である可能性が高いという指摘（天野哲也「討論」『北方世界と秋田城』六一書房、2016）なども参考となる。

### 擦文期における首長の二面性

以上のように、10世紀頃の擦文社会では、元慶の乱を契機とする秋田城の朝貢交易体制の崩壊を時代背景として、本州北端、とくに青森県域のエミシ社会と新たな紐帯を結びなおす必要性に迫られた。その際に祭祀・儀礼の共有は大きな意義を有した。北海道と本州北端の社会とが新たなかたちで結合していくのと並行して、本州由来の祭祀・儀礼が波状的に北上していく。当時の北海道でそれらを受容・執行したのは、本州北部からの移住者や滞在者、あるいは、彼らと通婚した在地の有力者・首長である蓋然性がある。

しかしながら、本州の祭祀・儀礼はそのまのかたちでは津軽海峡以北に定着せず、文化変容・翻案が繰り返されて、アイヌの民族文化の自律性・自立性につながっていった。擦文社会の首長たちは、対外交流に際して、外来の精神文化とその文物に「波打ち際」で対応し、内的・外的な使い分けをみせたのではないか。ここには、かつて石母田正氏の指摘した「首長の二面性」（卑弥呼のもつ「二つの顔」）が想起される（『日本の古代国家』第一章）。擦文社会は、本州との経済交流と、それに伴う祭祀・儀礼の北上に接しつつも、その奔流に一方的に飲み込まれたわけではなかった。

10世紀前後から、擦文土器は本州の土器文化とは異なるきわめて独自の展開をとげていく。同時期には、道央の擦文遺跡において、民族誌的なアイヌ文化におけるイクパスイ（捧酒箸）の先駆ともみられる木製品が出現している（千歳市美々8遺跡、同ユカンボシC15遺跡）。また、アイヌ文化の「イトクパ」（祖印）の源流とみられる刻印記号が、日本海沿岸を中心とする地域の擦文土器（坏の底部）にみられるようになる（瀬川2014）。さらに、民族誌的なアイヌ文化につながる動物送り儀礼の痕跡（10～12世紀頃の奥尻島青苗貝塚のアシカ送り、伊達市南有珠7遺跡のメカジキ送り、羅臼町オタフク岩遺跡のクマ送り儀礼など）にも注目される。擦文＝アイヌ社会は、南から殺到する新たな経済・文化のなかで自律性を保ち、「固有」の文化を洗練させていったのである。

### (3) 10～12世紀の北東アジア情勢と「サハリン・ルート」

#### 考古学からみた10～12世紀の「サハリン・ルート」

近年の考古学研究では、9世紀以後の大陸と北海道方面との「サハリン・ルート」の交渉は、7～8世紀と比べ低調と評価されることが多い（熊木2018）。

しかしながら、サハリン・北海道・東北北部の各地で、9世紀の大陸系遺物が減少する一方で、10世紀以後については、大陸系土器やガラス玉、北宋銭、装飾品など、「北周り」交流の活発化を示唆する考古資料の類例は決して少なくないと思われる。

サハリンの旧本斗町遠節（ネヴェリスク市）、網走市モヨロ貝塚などでは、かつて「遼代」の土器とされたパクロフカ文化の陶質土器が出土している。また近年、南サハリンの白土主城からも、南貝塚期の住居址からパクロフカ文化の土器片が2点出土している（前川編2007）。さらに最近、礼文島浜中2遺跡の2011年度の調査で、元地式土器の出土する層位（当時の層序でⅡ層。10～12世紀頃）からパクロフカ文化系の黒色磨研土器が出土した。

稚内市オンコロマナイ貝塚やモヨロ貝塚では、早くから北宋銭の出土も知られている。モヨロ貝塚からは、10～11世紀に編年される小鐸（白杵編年第4期）も出土している。また、アムール川中流域のパクロフカ文化に由来する10～11世紀頃の青銅製帯飾板が、南サハリンのセディフ遺跡から4点、千歳市美々8遺跡で1点出土している。最近、道央の厚真町ニタツナイ遺跡では、Z字状の断面を呈し、パクロフカ文化のナデジンスコエ遺跡に類例のある鉄鎌（11世紀前半）が出土して注目を集めた（菊池2010）。

このように、10～12世紀頃に関する「北周り」交流の物証は増大しつつある。今後の考古学的研究の進展も含め、さらなる検証が必要であるとはいえ、この時期のサハリン・北海道の社会は、遼代の女真・五国部によって再編された交易網と接触し、広域的な国際流通圏の一環を構成していった蓋然性がある。13世紀の「北からの蒙古襲来」の前提を考えるうえでも重要である。

#### 10世紀以後における擦文文化のサハリン進出とクロテン皮

10～11世紀前後のサハリンには、オホーツク文化末期の南貝塚期のグループが居住していた。同時期には、宗谷海峡をへだてた北海道の道北に擦文文化が進出し、小平町高砂遺跡などを先駆として、幌延町音類遺跡に代表される大規模な集落群が成立しはじめている。さらにこの頃、サハリンから擦文土器の出土例がみられるようになり、擦文人によるサハリンへの渡来を想定する意見もある（瀬川2007）。一方で、北海道内の各地から南貝塚式土器が出土している（氏江1995）。

この時期における日本の貴族社会の交易品として注目すべきものに、クロテン皮がある。長和4年（1015）、藤原道長は「奥州貂裘三領」を天台山への贈り物としている（『御堂関白記』長和4年7月15日条）。平安日本において、渤海や唐・宋などからの舶載でなく、列島北部からクロテン皮を入手するルートが実在したことを示唆する。本州のキテンや北海道のエゾクロテンの冬毛が黄褐色であるのに対して、サハリンには渤海産など大陸のものと遜色ない黒褐色のクロテンが生息する。後世の認識ではあるが、サハリンと北海道とではクロテンの毛皮の品質に大きな格

差があった。例えば、江戸後期の松田傳十郎によれば、北蝦夷地（サハリン）産のクロテン皮は、東西蝦夷地（北海道）産の4倍の交換レートで取引きされていた（『北夷談』第5）。また、「貂、地方夷地（北海道）の産する処は、其色黄にして下品也。当島（サハリン）奥地の産は色至て黒し。是を上品とす。満洲にては是を悦ぶ。」（『同』第3）という言及もある。したがって、この道長から天台山への贈り物となった「奥州貂裘」など、10～11世紀頃の貴族社会で珍重された「ふるきのかわぎぬ」（『源氏物語』末摘花など）の実態は、擦文集団の手を介してサハリンから入手されたクロテンの製品であった蓋然性がある（蓑島2015）。

上記のとおり、10～11世紀以後の擦文文化は、宗谷海峡を越えてサハリンとの結びつきを強めており、そこには、平安日本によるクロテン皮への需要を背景に、高品位なサハリン産クロテンの獲得をめざす目的があったのかもしれない。一方このころ、北東アジア大陸においても新たな動きが生じていた。

## 10世紀の北東アジア情勢

926年、遼（契丹）の攻撃を受けて渤海は滅亡し、靺鞨諸部は長期にわたった渤海の支配から離脱する。文献上は靺鞨から女真（女直）・五国部へ、考古学的には初期女真文化（ニコラエフカ文化）およびパクロフカ文化の時代へと、北東アジアの情勢は大きく変化する。

渤海国家による靺鞨諸集団への交易規制は、渤海滅亡の前夜から空洞化が進んでいたようだ。886年、「宝露国・黒水国」の人が新羅の国境に出没し、通交を図ったという（『三国史記』新羅本紀・憲康王12年条）。924・925年には後唐への「黒水」らの来貢が記録される（『五代会要』黒水靺鞨、『新五代史』唐本紀・同光3年5月己酉条、『同』四夷附録・黒水靺鞨）。こうした靺鞨の活動再開は女真や五国部に受け継がれ、中国（五代・宋）・遼・高麗との新たな交易体制が紆余曲折しながら形成されていく。

10世紀の女真による中国との交易には、それを保障する裏付けがあった。10世紀の鴨緑江流域には、旧渤海の五京の一つ、西京鴨渌府を本拠地とする定安国が存在した。鴨渌府は渤海時代の「朝貢道」に位置し（河上1989）、鴨緑江を下って黄海に出、山東半島の登州に到る交通ルートの拠点であった。鴨緑江ルートは、渤海滅亡後においても、女真の対中国交渉にとって最重要の幹線としての役割を担っていた。そのため10世紀代の女真は、鴨緑江流域を押さえた定安国と協調関係を結び、五代～宋との盛んな通交と交易活動を実現していた（日野1950・1951）。

## 10世紀末～11世紀の転換 — 「刀伊襲来」の背景

ところが、遼の聖宗（在位982-1031）が即位してまもなく、遼は数次にわたる外征で定安国を攻撃し、991年には、鴨緑江流域に「威寇・振化・来遠」の「三城」を築いて「戍卒」を置いた（『遼史』統和9年2月甲子条）。これによって、女真による宋への朝貢ルートは閉ざされてしまう（日野1961）。同年に宋に来朝した女真首領の羅野里鷄らは、遼が女真と宋の通交を怒り、「三柵」を築き、兵三千を置いて朝貢路を絶ったため、「海に沈びて」（高麗経由であろう）入朝したと報告した。彼らは宋に出兵を乞い、共同して三柵を除くことを願ったが、宋は出兵しなかったため、「其の後遂に高麗に帰」したという（『宋会要』蛮夷3・女真・淳化2年条）。また『統資

治通鑑長編』大中祥符8年(1015)癸酉条にも、高麗使とともに入宋した東女真首領の何盧太(阿盧太)が、遼が鴨緑江沿岸に「浮橋」を作り「寨」を築いたので、これを破壊したいが兵力が足りないと訴えている。

この鴨緑江遮断を境として、女真による高麗沿岸部への襲撃が顕在化するようになる。女真の海賊活動の実質的な初見は1005年である(『高麗史』穆宗8年)。女真たちは、1018年に于山国(鬱陵島)を攻撃するなど海賊的活動を激化させ、翌1019年(寛仁3)には北九州沿岸にも襲来する。いわゆる「刀伊の入寇」(ここでは「刀伊襲来事件」とする)である。

すなわち、1019年3月27日、50余艘の「刀伊」=女真の船団が対馬を襲い、次いで壱岐・筑前・肥前の国々を襲った。船団は、4月13日には肥前松浦郡を荒らして去った。その過程で、殺害された吏民は多数に上ったが、略取された人数はさらに多かった(寛仁3年4月16日「大宰府言上撃取刀伊国賊徒状解」(『朝野群載』巻20・異国)、『小右記』寛仁3年6月29日条など)。その背景には、奴婢貿易との関連が考えられる(池内1920)。

そもそも女真は、その祖先集団とみなされる時代から、船で近隣の民族を襲うことがあった。『三国志』には、古代北東アジアの挹婁について、「其の国船に乗り寇盜するに便ひ、隣国之を患ふ」(挹婁伝)とあり、北沃沮が挹婁の襲来を恐れ、夏季に山の中に入って守備していたことも記される(東沃沮伝)。その一方で、すでに当時から、良質な「挹婁貂」は、中国にも知られた特産品であった(挹婁伝)。北東アジアの住民が、挹婁の時代以来、中国などと長距離交易で深く結びついていたことが知られる。このような女真社会にとって、宋との交易はきわめて重要であり、自己の存立の基盤にかかわるものであった。交易活動と海賊活動がしばしば表裏一体のものであることは、人類史に普遍的な現象として指摘される。しかしながら、11世紀前後の女真によるあまりにも苛烈な「海賊活動」は、必ずしも自然な姿とはいえない。つまり、1019年の「刀伊襲来」事件とそれにつながる女真の一連の「海寇」は、遼の軍事行動によって宋との交易ルートが断たれた彼らの混乱・矛盾が、もっとも過激なたちで表出したものであったといえよう(養島1999)。対外交易の保障と安定は、依然として北東アジア諸族の情勢と動向を大きく左右したのである。

ところで、刀伊襲来よりやや早く、997年(長徳3)には、奄美島人による西海道諸国への襲来事件があった。池内宏氏は、時期の近いこの事件も実態は刀伊による海寇であったと推定したが(池内1920・1926)、それは誤りである。奄美島人襲来事件の概要は、「奄美島の者」が筑前・筑後・薩摩・壱岐・対馬の諸国に乱入して殺人・放火をおこない、財物を奪い、三百人に及ぶ人民を略取したというものである(『小右記』長徳3年10月1日条)。あわせて、これ以前に大隅で四百人の人民が略取される事件のあったことも報告された。

当時の奄美地方は、日本・高麗・宋をまたぐ越境的な交易者が活動する場であり、広域的なネットワークにおける要衝としての地位を占めていた(田中2012など)。したがって、997年およびその前後の奄美島人襲来事件は、当時の東アジア的な交易世界の存在を前提に起きたものである可能性がきわめて高い。

10世紀末から11世紀初にかけて、ごく近接した時間と場所で起きた二つの「襲来」事件には似かよった面もある。しかし、広域的な視点からは、二つの事件の背後に、それぞれ大きく異なる

る歴史状況の存在が指摘できる。「奄美島人襲来」事件は、奄美地方と東アジア海域世界との密接不可分の関係によって発生した。それに対して、「刀伊襲来」事件は、刀伊＝女真が東アジアの海域世界から切断されるという苦境のなかで生じた事件であった（菟島 2019）。

なお、この時期においても、かつての高句麗・渤海時代のような、日本海を横断する航路がとられていないことには注意を要する。刀伊襲来は、日本海の北岸に沿って、高麗の沿岸部を襲撃していた女真人たちの活動の延長であり、1018年に鬱陵島が攻撃されることなどはあっても、それ以上に日本海横断的な渡海が試みられることはなかった。

### 名鷹・海東青をめぐる交流

10世紀以後の北東アジア大陸と日本列島のあいだで、日本海横断航路による往来がみられなくなる一方で、女真らの経済活動の展開は、アムール川下流域からサハリン・北海道方面に対しても、その余波を確実に及ぼした可能性が高い。

10世紀末に対中国交渉の幹線を断たれた女真は、次第に遼への従属を深めていった。1004年に遼が宋と澶淵の盟を結んで以後は、こうした傾向にさらに拍車がかかったであろう。先述の『宋会要』蛮夷3・女真・淳化2年条は、女真が「其の後遂に高麗に帰」したとするが、ここでの「高麗」を『統資治通鑑長編』では「契丹」としている（日野 1961）。最近、高井康典行氏は、10世紀末～11世紀初に遼が女真を「再征服」して支配を深めたことを想定している。しかもこの時期、遼は自らを「中華」「中国」に位置付けて振る舞うようになり、遼と女真の関係は重大な転機を迎えたという（高井 2016）。

11世紀頃の遼や女真の関係を考えるうえで、重要な産物としてタカがあげられる。この頃、前近代の中国における北東アジア産物のシンボリック的存在であり、多分に伝説化された優れたタカである「海東青」に関する記録が登場しはじめている。

#### （史料 10）『契丹国志』 卷 10

女真は東北を五国に隣し、五国は東を大海に接す。名鷹を出す。海東より来れるは、これを海東青と謂ふ。小にして俊健なり。能く鵝鶩を擒ふ。爪の白きは尤も以て異となす。遼人これを酷愛して、歳歳女真に求む。女真は五国に至りて戦闘し、しかる後に得る。

ここには、優れたタカである「海東青」は五国部の所産であり、これを強く欲する遼の要求に応えるため、女真は五国部と戦闘してこれを得ていたという。遼による産物需要の圧力は、女真だけでなく、それ以北の五国部にまでその余波を及ぼしていたことが示唆される。

「海東青」を含む五国部の産物は、通常は平和的な交易によって入手されていたのであろう。ただし、『契丹国志』 卷 9・10・26などは、海東青を求める遼人への怨恨が、女真による遼の打倒および金の建国の遠因となったとしている。遼による収奪はきわめて厳しいものであり、海東青の入手を求める女真の五国部に対する姿勢も、しばしばトラブルや「戦闘」を引き起こすほど苛烈なものにならざるをえなかったのである。

ここでもう一点注目したいのは、「海東青」の原産地である。上記によれば、五国部は「東を



大海に接」しており、「名鷹を出」し、「海東より来れるは、これを海東青と謂ふ」とされる。つまり、「海東青」は海の向こうから飛来するタカであり、五国部の地に「海東より来れる」という海東青は、実質的にはサハリン方面が産地であるとみてよからう。

時代は下るが、元代の記事にも注目される。海東青について『元史』は、

(史料 11) 『元史』地理志

俊禽有りて海東青と曰う。海外より飛来し、奴兒干に至る。土人之を羅して、以て土貢と為す。

と記載する。「奴兒干」(ヌルガン)は、元や明が拠点を置いたアムール下流域～河口近くの要衝である。つまり元代のアムール川下流域では、「海外」(サハリン方面であろう)から飛来する海東青を地元の住民が捕らえて朝貢品としていた。

さらに、実際にはこの頃、海東青の生産と交易は、直接サハリンの地にも及んでいたことが知られる。13世紀後半～14世紀初頭にかけて、しばしば「北からの蒙古襲来」などと称される、モンゴル帝国(元)と「骨嵬」(クイ=アイヌ)との紛争が起きている。『元文類』所収の『経世大典序録』によれば、両者の抗争の一因として、海東青をめぐる争いがあったことがうかがわれる。すなわち、1297年8月、「吉烈(里)迷」(ギレミ=ニヅフ)の人が来て、クイがギレミの「打鷹人」を捕虜にしようとしていると訴えた。その後クイが「果夥」(クォフオ)という場所を越えて侵攻してきたので、元はこれを破った(中村1992・1997)。この「果夥」については、サハリン最南端のクリリオン岬に位置する自主土城に当たる可能性が論じられている(中村1991)。自主土城は、一辺約120mの方形の壕と土塁を有する、江戸時代から存在の知られた遺跡であり、近年の調査において、金末～元代頃の築造とみて矛盾しないとの見解が提出されている(前川編2007)。つまり、13世紀のサハリンには、元に海東青を献上するニヅフの鷹匠が多くおり、アイヌはその権益に介入しようとしていた。

先述のとおり、遼代には海東青の需要は高まっており、そのことは女真や五国部にも多大な影響を与えていた。とすれば、元代におけるような、海東青をめぐる北東アジア諸民族の関係は、遼代に遡ってその原型を認めうるかもしれない。つまり、すでに11世紀前後には、海東青を求める女真・五国部によって、サハリン方面への交易路が伸びていたことを想定してもよいのではあるまいか。

これまで述べてきたように、10～11世紀の女真や五国部は、当初は中国との、のちには遼との関係を基軸として、アジア的な経済圏の一端に巻き込まれていった。とりわけ、澶淵の盟を画期とする11世紀以後の遼の活動は、女真や五国部の動向を大きく左右したと推察される。遼一女真一五国部の関係を背景として、大陸からサハリン、列島北方地域、あるいはオホーツク海北岸方面へとつながる広大な交易圏が形成されていった蓋然性であろう。その成立を後押しした交易品として、文献史料からは、「海東青」のようなタカが存在が指摘できる。

## 平安日本の北方認識への影響

以上のような諸条件によって、10～11世紀以後の大陸と列島北部とを結ぶ「北周り」ルート

〔サハリン・ルート〕は、再び活況を呈した蓋然性がある。そしてこのことは、古代日本の支配層による北方認識にも影響を及ぼした。

7世紀以前に遡ってみてみると、『日本書紀』には欽明紀・斉明紀・天武紀・持統紀に「肅慎」が登場する。これらの「肅慎」の実態はオホーツク文化である可能性が高いが、いずれにせよ7世紀において、倭国・日本の支配者たちは、日本列島がその北辺において大陸の民族世界に連続しているという認識を明瞭に有していた（室賀1982、熊田1986）。

こうした認識は8世紀にも引き継がれる。「肅慎」の用例は基本的に『書紀』に限られ、『続日本本紀』では「靺鞨」の表記が採用されるが、両者の訓みはともに「アシハセ」であり（児島1984）、古代日本において両者は同一のものとみなされた。養老4年（720）には「渡嶋津軽津司」が「靺鞨国」に派遣され、その「風俗」を観察する。天平宝字6年（762）立碑の多賀城碑には、「去靺鞨国界三千里」と記される（これらの「靺鞨国」についても、大陸の靺鞨や渤海国ではなく、直接にはオホーツク文化の領域に当たる可能性が高い）。また8世紀には、出羽国にしばしば渤海使が来着しており、秋田城で迎接された例もあったろう。このように8世紀の日本は、奥羽の先に対岸世界としての「靺鞨」の存在を認識していた。

ところが、9世紀の列島北方地域は、認識レベルで対岸に開かれていたか疑問がある。とりわけ、出羽国から報告された石鏃出現記事には注目される。

（史料12）『日本紀略』貞観10年（868）4月15日

十五日己卯、（中略）出羽国言す、飽海郡月山・大物忌両神社の前に、石鏃六枚雨る。

（史料13）『日本三代実録』元慶8年（884）9月29日

廿九日丙戌、出羽国司言す、「今年六月廿六日、秋田城に雷雨して晦冥し。石鏃廿三枚雨る。七月二日、飽波郡の海浜に石雨り、鏃に似たり。其の鋒は皆な南を向く」と。陰陽寮占いて云く、「彼の国の憂、応に兵賊・疾疫在るべし」と。

（史料14）『同』仁和元年（885）11月21日

廿一日辛丑、（中略）去る六月廿一日、出羽国の秋田城中、及び飽海郡神宮寺の西浜に石鏃雨る。陰陽寮言す、「当に凶狄の陰謀・兵乱の事有るべし」と。神祇官言す、「彼の国飽海郡の大物忌神・月山神、田川郡の由豆佐乃売の神、俱に此の怪を成す。祟りは不敬に在り」と。勅して国宰をして恭しく諸神を祀り、兼て警固を慎ましむ。（後略）

（史料15）『同』仁和2年（886）4月17日

十七日丙寅、出羽国をして警固を慎ましむ。去る二月、彼の国の飽海郡の諸神社の辺に石鏃雨る。陰陽寮占いて云く、「宜しく兵賊を警すべし」と。是に由りて、預けて不虞を戒ましむ。

すなわち、秋田城や出羽国飽海郡などに「石鏃」が降り、兵乱や疫病の予兆として警固が命じられている。時代背景として、878～880年にかけて元慶の乱が起きている。また、飽海郡は貞観15年（875）11月16日条に「渡嶋荒狄」が水軍80艘で襲撃した場所である。

「石鏃」は、容易に「肅慎」および対岸世界を連想させる。にもかかわらず、上記の諸史料における「石鏃」は、あくまでも兵乱や疫病の予兆として抽象化され、出羽国の諸神への不敬ゆえ

の崇りなどと解釈されている。ここには、「肅慎」ひいては対岸世界とのつながりという意識は全く欠落しており、国内問題としての認識しかみることができない。これは、8世紀段階の多賀城碑（「靺鞨国界を去ること…」）や、のちの平泉政権にみられる北方認識（「肅慎・挹婁の海蛮」）とは大きな隔たりがある。すなわち、9世紀の列島北部は、認識レベルで対岸に開かれていない。

その背景として、9世紀、渤海使の出羽への来着が一例もみられないことがあげられる（北陸・山陰に集中）。また、先述のように、9世紀の北海道は考古学的にみても大陸系遺物がきわめて少ない時期にあたっており、現実の「サハリン・ルート」が閉じることと、認識レベルとは連動していた可能性がある。こうして、9世紀の奥羽のエミシ・俘囚の地は、対岸世界に接した「境界」ではなく、「国土の一地方」として、地理認識のうえて閉ざされていった。

一方で、「サハリン・ルート」に再生の兆しのみられる10世紀以後はどうか。

これと関連するのが「エゾ」概念である。中世的エゾは観念的次元において「日本国」の境界の外に追却された存在であり（大石1980・1988など）、中世的エゾの形成過程は「北」「東」に対する国土観・異域認識の変容と密接である。「エゾ」は12世紀の和歌類を確実な初見とし、近年では11世紀後半の「源頼俊申文」における「衣曾別嶋」（エゾノワケシマ）の例が目目されている（熊田1986）。この問題について、斉藤利男氏は、天慶2年（939）5月の（前掲史料7）を重視した。すなわち、出羽俘囚の乱に際して、秋田を襲撃した俘囚たちは、「異類を率いて来るべし」と称したとされる。斉藤氏は、10世紀前半に北方集団に対する異族視の強まりを見出し、この「異類」を中世的「エゾ」の源流として評価した（斉藤1996）。「異類」観念は、9世紀後半の日本王権が新羅海賊を「他国異類」と称した（『三代実録』貞観11（869）12月29日条）ことにも通じ、きわめて排外主義的な色彩の強い認識といえる。この時期、北海道の住民など、北方集団の一部は、エミシ・俘囚の範疇から切り離され、徳化の対象たることを放棄されて、国家領域から観念的に放逐されていった（蓑島2010b・2015）。

この10世紀以後、日本の支配層の認識には、大陸に由来する「肅慎」という民族イメージがよみがえる。賭弓や御禊行幸などの場面では、「鷲羽」と併記される「肅慎羽」の存在が、平安中期の貴族社会で流布するようになる（『西宮記』臨時4・賭弓など参照）。このことは、「日本列島の北辺と大陸との連続性」という地理認識の再生を意味していると考えられる。『類聚国史』において、「肅慎」が、「風俗部」に分類された蝦夷・俘囚と異なり、「殊俗部」に分類されている点にも留意される。

同様の認識は、安倍頼時の渡海伝説（「陸奥国の安倍頼時、胡国に行きて空しく返る語」『今昔物語集』巻31-11）にも濃厚にみてとれる。この説話の末尾、筑紫にあった安倍宗任の述懐に、「胡国ハ唐ヨリモ遥ノ北ト聞ツルニ、陸奥ノ国ノ奥ニ有、夷ノ地ニ差合タルニヤアラム」と端的に表明されているように、遅くとも11世紀頃の日本の支配者たちは、「エゾ」は大陸の諸民族の世界に接しているという地理認識を明瞭に抱くようになっていた。

『将門記』において、平将門は渤海を滅ぼした遼（東丹国）を引き合いに自己の行動を正当化しているが、『今昔物語集』の「胡国」像には、遼のイメージが投影されていたのではないかと。ユーラシアの影響が北方ルートで日本へ波及するという恐るべき可能性が、支配層の観念レベルでは一時的にせよ現実性を帯びるのである（蓑島2010b）。

こうした経緯のなかで、11世紀には「エゾ」認識が確立する。「エゾ」世界は、観念上、大陸の諸民族の世界に属し、「日本国」の「外部」に位置づけられて成立した。一方、「倭囚」の世界は、「日本国」の閉じられた「内部」に包摂されることになる。

平安期において、遼・女真と日本国が直接関わりをもつ機会は、一部の例外を除いてきわめてまれであった。しかし、エゾの登場をふくむ中世的な国土認識の成立など、観念レベルではその影響はきわめて大きかったといえる。その背景に、現実の北方交流（とりわけ「サハリン・ルート」）の盛衰がかかわっていた可能性を視野に入れるべきであろう。

## おわりに

最近、高井康典行氏は、遼代までの北東アジアにみられた、交易を介したゆるやかな国家統合のシステムを「渤海的秩序」と名づけている。

「遼は926年の渤海征服後、それ以前の渤海による北東アジア秩序を継承し、10世紀を通じてこれを維持した。秩序の維持のためには「中国」をはじめとした周辺諸国との交易の確保が求められ、遼の対外関係はこれによって規定されていくことになる。つまり、「渤海」の要素は遼の国内統治だけの問題ではなく、国家間の秩序の問題にまで結びついていくのである。また、11世紀になると、遼はこれまでの渤海的秩序の維持から一転して自らを「中国」として位置づけるようになるが、これは後の女真の勃興と金の成立の契機となり、北東アジア地域を「中国」に密接に結びつける一因となったことも注目に値しよう」（高井2016、440頁）。

ここに総括されているように、高井氏は、古代北東アジアにおいて、現地集団の自立性・自律性を認め、そのうえで彼らの「中国」との交易を仲介する政治権力＝「渤海的秩序」が存在したことを提起する。渤海の鞅鞅支配体制は、それ以前の高句麗の支配方式を踏襲するものであり、高井氏のいう「渤海的秩序」は、高句麗期から10世紀の遼代までの北東アジア史を規定する大きな枠組みといえる。そして、宋と澶淵の盟（1004年）を結んだ遼は、「渤海的秩序」を放棄し、自己を中心とする新たな秩序のもとに女真らを従属させていったとする。遼が自己を「中国」「中華」に位置づけるという転換が、その後の女真の台頭と金の成立につながったというのである。

高井氏の見解は示唆に富むところが多いが、より丁寧なみれば、完顔部の勃興をうけた金の形成や、その後の明との関係を通したヌルハチの台頭にみる後金・清の成立なども、当初は彼らが「渤海的秩序」を踏み台として国家形成をとげ、その後、自ら「中国」「中華」を志向するという二段構えの展開を考えた方がよいのではないか。

ところで、高井氏の提起は、日本列島の北方史を解釈するうえでも興味深い。最近、斉藤利男氏は、奥州藤原氏＝平泉政権の意義を北方世界とのつながりからとらえなおし、工藤雅樹氏の着想にも導かれて、「北の辺境政権」としての平泉政権を、唐に対する渤海国に類する存在として位置づけている（斉藤2014）。また最近、渤海や女真・金における交易と仏教信仰の様相を、平泉と比較する視点も提示されている（中澤2017）。斉藤氏らの問題提起は、高井氏の枠組みをもとに新たな光を当てる余地があるように思う。つまり、北方の諸集団を、交易を介してゆるやかに統制し、日本国との交易に接続したという意味において、平泉政権の北方支配のあり方も、「渤

海的秩序」という側面から検討してみる可能性を有する。

そしてこの問題は、アイヌ民族がなぜ独自の国家形成を遂げなかったかという大きな問題にもヒントたりうると思われる。日本列島北部における「渤海的秩序」の端緒は、平泉政権に先立って、10・11世紀の安倍氏・清原氏の段階に見出しうるといえよう。安倍氏・清原氏から、12世紀の平泉政権の時代をへて、本州東北地方は1189年の奥州合戦によって源頼朝に征服される。しかしその後まもなく、エゾ島との交易は、津軽十三湊を本拠地とし、鎌倉幕府から委任されて「蝦夷の沙汰」を行使する安藤氏(安東氏)の手にゆだねられる。こうして列島北部に生まれた「渤海的秩序」は、その後の15世紀以後にも、蠣崎氏—松前藩によって継承される。ところが、松前藩の中～後期には、本州資本の進出によって蝦夷地に場所請負制が展開し、アイヌ社会は独自の国家形成をみせることなく、日本による植民地化を被っていくことになる。

以上にみるように、前近代において、北海道・アイヌ社会が日本国家と直接的に交渉する時代は、7世紀後半(阿倍比羅夫の北航)から、秋田城が国家的な交易拠点として機能する8～9世紀までの期間に限られる。それ以外の期間、北海道・アイヌ社会は、一貫して、彼らの自立性・自律性にもとづいて、日本社会との交易をゆるやかに中継・媒介する政治権力との関わりを中心的な対外関係としてきた。前近代の北海道・アイヌにおいて、「中国」を自認するような国家との関係は間接的なものにとどまり、そこには常に「渤海的秩序」を有する政治権力が介在していた。アイヌ社会の内部で「渤海的秩序」を生み出すような動きは成熟しなかった。

このことは、アイヌ社会において、女真や満洲族にみられたような、対外交易を社会内部の富や権力集中に転化し、社会統合を遂げるという歴史展開を阻害する一因として働いたのではないか。外部の権力によって収奪されたケースもあるかもしれないが、むしろ国家形成に向かわずに、社会を分節的なまま安定させる力が働くのかもしれない。アイヌが独自の国家形成をみせなかった要因には、上記の事情が深くかかわっているのではないか。

もちろん、「渤海的秩序」の当否はまだ十分に検証されておらず、概念をさらに深化させる余地もあろう。しかしながら、前近代の北東アジア(日本列島北部も含め)の政治・経済・文化をつらぬく分析概念として、「渤海的秩序」概念には一定の有効性がある可能性がある。

#### 引用・参考文献

- 青森県教育委員会編 2002『朝日山(2)遺跡V』  
秋田地所(有)・秋田市教育委員会編 1981『昭和53年度 後城遺跡発掘調査報告書』  
厚真町教育委員会編 2009『上幌内モイ遺跡(3)』  
厚真町教育委員会編 2017『上幌内2遺跡』  
池内宏 1916「遼の聖宗の女直征伐」『史学雑誌』26-6(のち同 1933『満鮮史研究』中世一(岡書院)に再録)  
池内宏 1920「高麗朝に於ける東女真の海寇」『満鮮歴史地理研究報告』8(のち同 1937『満鮮史研究 中世二』吉川弘文館に再録)  
池内宏 1926「刀伊の賊—日本海における海賊の横行」『史林』10-4(のち同 1933前掲書に再録)  
石井正敏 2001『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館  
井上雅孝 2002「錫杖状鉄製品の研究—北東北における古代祭祀具の一形態」『岩手考古学』14  
井上雅孝 2004「錫杖状鉄製品の研究(2)—分布に関する諸問題」『岩手考古学』16

- 井上雅孝 2006 「古代鉄製祭祀具から見た蝦夷の信仰と儀礼」『立正史学』99
- 入間田宣夫 1997 「延久二年北奥合戦と諸郡の建置」『東北アジア研究』1（のち同 2005 『北日本中世社会史論』吉川弘文館に再録）
- 入間田宣夫 2018 「「尾駮牧」「糠部駿馬」をめぐる人・物・情報の交流について」『尾駮の駒牧の背景を探る』六一書房
- 氏江敏文 1995 「南貝塚式土器に関するメモ」『北海道考古学』31
- 大石直正 1978 「中世の黎明」『中世奥羽の世界』東京大学出版会（のち同 2010 『中世北方の政治と社会』校倉書房に再録）
- 大石直正 1980 「外が浜・夷島考」『関晃先生還暦記念 日本古代史研究』吉川弘文館（のち同 2010 前掲書に再録）
- 大石直正 1988 「中世の奥羽と北海道—「えぞ」と「ひのもと」」『北からの日本史』三省堂（のち同 2010 前掲書に再録）
- 大和久震平 1990 『古代山岳信仰遺跡の研究—日光山地を中心とする山頂遺跡の一考察』名著出版
- 小口雅史 2014 「石江遺跡群の歴史的背景とその展開」『石江遺跡群発掘調査報告書』Ⅶ、第三分冊、青森市教育委員会
- 河上 洋 1989 「渤海の交通路と五京」『史林』72-6
- 菊池徹夫 1995 「遺跡に見る中世蝦夷地の風景」『蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社
- 菊池俊彦 1995 『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 菊池俊彦 2004 『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 菊池俊彦 2010 「厚真町ニタップナイ遺跡出土の鉄鏃について」『北海道考古学』46
- 木村淳一 2014 「第一章 新田（1）遺跡」『石江遺跡群発掘調査報告書』Ⅶ、第三分冊、青森市教育委員会
- 熊木俊朗 2018 『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター
- 熊田亮介 1986 「蝦夷と蝦狄」『東北古代史の研究』吉川弘文館（のち同 2003 『古代国家と東北』吉川弘文館に再録）
- クライナー, ヨーゼフ・小口雅史・吉成直樹編 2010 『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』森話社
- 黒龍江省文物考古研究所 2009 『寧安虹鱒漁場』文物出版社
- 越田賢一郎 2003 「北方社会の物質文化」『蝦夷島と北方世界』吉川弘文館
- 児島恭子 1984 「エミシ、エゾ、毛人、蝦夷の意味—蝦夷論序章」『律令制と古代社会』東京堂出版（のち同 2003 『アイヌ民族史の研究』に改稿して再録）
- 斎藤 淳 2002 「本州における擦文土器の変遷と分布について」『市川金丸先生古稀記念献呈論文集 海と考古学とロマン』
- 斎藤 淳 2011 「「海峡世界」の歴史的枠組について—生業と交流の視点」『アイヌ史を問いなおす—生業・交流・文化継承』勉誠出版
- 斎藤 淳 2016 「土器からみた地域間交流—秋田・津軽・北海道」『北方世界と秋田城』六一書房
- 斉藤利男 1996 「蝦夷社会の交流と『エゾ』世界への変容」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 斉藤利男 1999 「北緯四〇度以北の十～十二世紀」『北の内海世界』山川出版社
- 斉藤利男 2006 「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌—奥大道・防御性集落と北奥の建郡」『十和田湖が語る古代北奥の謎』校倉書房
- 斉藤利男 2011 「安倍・清原・奥州藤原氏と北の辺境」『古代中世の蝦夷世界』高志書院
- 斉藤利男 2014 『平泉 北方王国の夢』講談社選書メチエ
- 酒寄雅志 2001 『渤海と古代の日本』校倉書房
- 鈴木 信 2003 「続縄文～擦文文化期の渡海交易品目について」『北海道考古学』39
- 鈴木拓也 1998 『古代東北の支配構造』吉川弘文館
- 鈴木琢也 2004 「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32

- 鈴木琢也 2006「古代北海道における物流経済」『アイヌ文化と北海道の中世社会』北海道出版企画センター
- 鈴木琢也 2014「擦文文化にシャマニズムを探る」『シャマニズムの源流を探る』弘前学院大学地域総合文化研究所
- 鈴木琢也 2016「須恵器からみた古代の北海道と秋田」『北方世界と秋田城』六一書房
- 鈴木靖民 1979「渤海の首領に関する予備的考察」『朝鮮歴史論集 上』龍溪書舎（のち同 1985『古代対外関係史の研究』吉川弘文館に改題して再録）
- 鈴木靖民 1996「古代蝦夷の世界と交流」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版（のち同 2014 著書に再録）
- 鈴木靖民 2014『日本古代の周縁史—エミシ・コシとアマミ・ハヤト』岩波書店
- 瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史—海と宝のノマド』講談社選書メチエ
- 瀬川拓郎 2014「祖印か所有印か—擦文時代における底面刻印の意味と機能」『環太平洋・アイヌ文化研究』11
- 関口明 1985「北海道式古墳と渡嶋蝦夷」『古代文化』37-7（のち同 2003『古代東北の蝦夷と北海道』吉川弘文館に再録）
- 関口明 1987「渡嶋蝦夷と毛皮交易」『日本古代中世史論考』吉川弘文館（のち同 2003 前掲書に再録）
- 関根達人 2007「平泉文化と北方交易 1—北奥出土のガラス玉」『平泉文化研究年報』7（のち同 2014『中近世の蝦夷地と北方交易』吉川弘文館に改題・改稿して再録）
- 関根達人 2008「平泉文化と北方交易 2—擦文期の銅鏡をめぐって—」『平泉文化研究年報』8（のち同 2014 前掲書に改題・改稿して再録）
- 関根達人 2016『モノから見たアイヌ文化史』吉川弘文館
- 十川陽一 2017「律令国家と出羽国—地域的特質についての基礎的考察」『山形大学歴史・地理・人類学論集』18
- 高井康典行 2016『渤海と藩鎮—遼代地方統治の研究』汲古書院
- 高梨修 2005『ヤコウガイの考古学』同成社
- 高橋 学 1997「口縁部に沈線文をもつ土師器」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会 1997 年度秋田大会資料集
- 武廣亮平 2004「『独犴皮』についての一考察—古代北方世界との交流と関連して」『日本歴史』678
- 田中史生 2012「七〜一一世紀の奄美・沖縄諸島と国際交易」（『国際交易と古代日本』吉川弘文館）
- 千歳市教育委員会編 1985『末広遺跡における考古学的調査（続）』
- 津野仁 2011『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
- 時枝務 2002「平安時代前期における山岳宗教の動向—三鉛鏡を手がかりに」『山岳修験』29
- 中川あや・降幡順子 2014「日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵・男体山頂遺跡出土鏡の調査」『奈良文化財研究所紀要 2014』
- 中澤寛将 2012『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真』北海道出版企画センター
- 中澤寛将 2017「北東アジアからみた平泉文化の特質」『平泉文化研究年報』17
- 中村和之 1991『『経世大典序録』にみえる果夥について』『一九九〇年度「北の歴史・文化交流研究事業」中間報告』北海道開拓記念館
- 中村和之 1992「『北からの蒙古襲来』小論—元朝のサハリン侵攻をめぐって」『史朋』25
- 中村和之 1997「十三〜十六世紀の環日本海地域とアイヌ」『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社
- 中村英重 1989「渡島蝦夷の朝貢と交易」『古代の東北—歴史と民俗』高科書店
- 日光二荒山神社編 1963『日光男体山—山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 浜田久美子 2017「渤海使の出羽来着について」『古代国家と北方世界』同成社
- 原 明芳 1996「銅鏡考」『長野県の考古学』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 樋口知志 1996「渡島のエミシ」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版
- 樋口知志 2005「蝦夷と太平洋沿岸交通」『日本史研究』511

- 樋口知志 2011『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』高志書院
- 日野開三郎 1950・1951「定安国考」『東洋史学』1・2・3（のち同 1990『東洋史学論集 16 東北アジア民族史（下）』三一書房に再録）
- 日野開三郎 1961「統和初期における契丹聖宗の東方経略と九年の鴨緑江口築城」『朝鮮学報』21・22 合輯号（のち同 1990 前掲書に再録）
- 日野開三郎 1964「宋初女真の山東來航の大勢とその由来」『朝鮮学報』33（のち同 1990 前掲書に再録）
- 北海道埋蔵文化財センター編 2016『厚真町 ショロマ 4 遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター編 2015『根室市 トーサムボロ湖周辺堅穴群（1）』
- 前川要編 2007『北東アジア交流史研究—古代と中世』塙書房
- 三浦圭介 1994「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』吉川弘文館
- 三浦圭介 1995「北奥・北海道地域における古代防衛性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』64
- 三浦正人 2001「北海道で出土する「コイル状鉄製品」について」『日本考古学の基礎研究』
- 三上次男 1973「高麗顕宗朝における高麗・女真間の貿易」『金史研究 3』中央公論美術出版
- 蓑島栄紀 1999「渤海滅亡後の北東アジアの交流・交易」『アジア遊学』6（のち同 2001『古代国家と北方社会』吉川弘文館に改題・改稿して再録）
- 蓑島栄紀 2001『古代国家と北方社会』吉川弘文館
- 蓑島栄紀 2010a「アイヌ史を問いなおす」『アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承』勉誠出版
- 蓑島栄紀 2010b「北方社会の史的展開と王権・国家」『歴史学研究』572
- 蓑島栄紀 2012a「古代北海道における太平洋側・内陸交流の実像」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
- 蓑島栄紀 2012b「十～十一世紀の北東アジア情勢と「北の中世」への胎動」『北から生まれた中世日本』高志書院
- 蓑島栄紀 2014「古代北海道地域論」『岩波講座日本歴史 第 20 巻 地域論』岩波書店
- 蓑島栄紀 2015「『もの』と交易の古代北方史—奈良・平安日本と北海道・アイヌ」勉誠出版
- 蓑島栄紀 2018「列島北方史からみた日本とアジア」『古代日本と興亡の東アジア』竹林舎
- 蓑島栄紀 2019「『刀伊襲来』事件と東アジア」『アジア遊学』（金史特集号、近刊）
- 村井章介 1995「王土王民思想と九世紀の転換」『思想』847
- 室賀信夫 1982「阿倍比羅夫北征考」『古地図抄』東海大学出版会
- 八重樫忠郎 2012「考古学からみた北の中世の黎明」『北から生まれた中世日本』高志書院
- 八木光則 2011「北奥の古代末期団郭集落」『古代中世の蝦夷社会』高志書院
- 山田悟郎・平川善祥・小林幸雄・右代啓視・佐藤隆広 1995「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」『北の歴史・文化交流研究事業 研究報告』
- 余市町教育委員会編 1994『1993 年度大川遺跡発掘調査概報』
- 李成市 1998「渤海の対日本外交への理路」『古代東アジアの民族と国家』岩波書店

※本稿の内容は、一部に蓑島 2018 を下敷きとして改稿した箇所を含んでいる。

※本稿は、JSPS 科研費 15K02824「アイヌ文化の基層と形成過程における古代日本文化の影響に関する基礎的研究」（代表：蓑島栄紀）、JSPS 科研費 16H01954「境界域での民族集団の形成：考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明（代表：加藤博文）、JSPS 科研費 18H00747「官衙機構の動態からみた日本古代における境域の特質」（代表：林部 均）による研究成果の一部である。